

八千代市村上古墳群

1979

八千代市都市部、都市計画課

序 文

本市は、健康な明るい市民生活の保障、人間性をつちかう教育、文化の充実、新しいふるさとの環境づくりの3つの柱のもとに、「調和のとれた健康都市」の実現に向かって、努力をしております。

このような縁のあふれる郷土の中で、歴史的な文化遺産の環境づくりを行なうことは、きわめて大切なことであります。

この度の村上古墳群の調査は、都市計画道路建設という公共性の高い事業との関連で、八千代市が村上古墳群発掘調査団に委託して記録保存の目的をもっておこなわれたものであります。

この調査により古墳、江戸時代の生活文化を知る上で貴重なる成果を挙げることができましたことは、ひとえに村上古墳群発掘調査団の方々の御努力の結果であります。

本書が埋蔵文化財に対する認識と理解を深めるものとなり、広く一般に活用され、八千代の歴史を知る資料の一部となれば幸いです。

最後に、本報告書の刊行にあたり、酷暑の中で現場調査にあたられた、日本大学講師竹石健二氏、調査員の方々、ならびに学生諸君、その他地元関係各位に対し深く御礼申し上げ序といたします。

昭和51年3月

八千代市教育委員会教育長 市川 浩一

序 文

八千代市は下総台地の内陸部に位置し、東は印旛沼、西は習志野原に隣接している人口約12万の市である。

近世初期以来、佐倉（成田）街道に沿った八千代市（かつては大和田と称した）は宿駅であったが、京成電鉄開通（大正15年）以後はその機能を失い、街村型農村集落と変化した。その後、牛乳メーカーの進出により乳牛飼育農家を出現させ東京中心の近郊農村に変質した。

近年は、東京のベッドタウンとして、また、京葉工業地帯隣接地域としての住宅団地の造成と工業団地の開発が急激に進展し、著しい都市化傾向を示すようになった。

このような傾向に対処するため、八千代市は計画的都市造りをすすめている。

この度の村上古墳群発掘調査は、こうした都市計画に基づく市道取付工事に伴なう事前調査として、八千代市都市計画課の依頼をうけて実施したものである。

発掘調査は、村上古墳群発掘調査団を組織し、調査団長に日本大学専任講師竹石健二、主任調査員に獨協大学職員高橋政敏、関口武司、調査員に千葉経済学園職員木原通勝、日本大学日大高校教諭・長谷川隆之、日本大学先史学会会員・佐伯明甫、調査補助員に日本大学先史学研究会の学生の協力のもとに記録保存を目的として行なわれた。

この発掘調査報告書が、市内に在住する考古学研究者を含めた歴史学研究者や八千代市民各位の文化財研究の貴重な一資料として役立つことを願っている。

また、本報告書の内容について先学諸氏の御助言、御教示等いただければ幸甚とするところである。

（竹 石 健 二）

例　　言

1. 本報告書は、千葉県八千代市村上字黒沢台に位置する古墳2基と塚1基の発掘調査報告書である。
2. 本古墳群の名称は、行政区画上の大字名をとって村上古墳群とした。
3. 調査は竹石健二（当時、日本大学専任講師）が担当し、高橋正敏・関口武司（獨協大学職員）が上任調査員を務めた。
4. 遺物整理は竹石・高橋・関口の指導で獨協大学考古学研究会が行なった。
5. 本報告書は、竹石健二・高橋正敏・関口武司・野中和夫がそれぞれ分担執筆し、編集は関口が担当した。執筆者名は分担項目の末尾に明記したが、字句の統一を含めて竹石が加筆・削除したので最終責任はすべて竹石にある。
6. 遺物説明の遺物番号は挿図に付された遺物番号とすべて同一である。
7. 本報告書の作成に際して、下記の方々の御協力をいただいた。記して謝意を表する次第である。久保常晴（立正大学名誉教授）・高橋正男（獨協大学教授）・沢田大多郎（日本大学講師）

調査団の構成

團長 竹石健二（日本大学専任講師）

主任調査員 高橋政敏（獨協大学職員）

関口武司（獨協大学職員）

調査員 木原通勝（千葉経済学園職員）

長谷川隆之（日本大学付属日大高校教諭）

佐伯明甫（日本大学先史学会会員）

調査補助員 野中和夫・田中次郎・加藤武美・河合英夫・大塚昌彦・渡井義彦・有田登紀・西沢君江・渡辺健二・伊藤智樹・鈴木敏中・堀切徹也・丸山信弘・山本茂樹・綱島美恵子・小林照教・清出房子・加藤典子・青木祐子・長野康敏・中沢伸子・内田聰司・清水喜美雄・栗田伸子・久米昌子（以上日本大学先史学研究会員）・池田秀一（獨協大学考古学研究会員）・坪田誠也（千葉経済学園職員）・三沢正善（日本大学文理学部実験助手）

遺物整理 竹石健二・高橋政敏・関口武司

池田秀一・杉林英夫・辻敬生・深田裕・藤木康子・杉山登美枝・海野典男・土田久美子（以上獨協大学考古学研究会員）

註：資格及び所属は発掘調査時のものである。

目 次

序 文

序 文

例 言

調査団の構成

第Ⅰ章	遺跡の位置と景観.....	(9)
	発掘調査の概要.....	(11)
第Ⅱ章	遺跡各説および出土遺物説明.....	(16)
	第1号墳.....	(16)
	第2号墳.....	(28)
	第3号墳.....	(31)
第Ⅲ章	考 察.....	(42)

掲 図 目 次

第1図	村上古墳群と周辺の遺跡	(10)
第2図	村上古墳群地形測量図	(12)
第3図	村上古墳群位置関係図	(13)
第4図	第一次調査分布図	(14)
第5図	第一次調査第一号塚墳丘実測図	(15)
第6図	第1号塚墳丘実測図	(20)
第7図	第1号塚東西土層断面図	(21)
第8図	第1号塚南北土層断面図	(22)
第9図	第1号塚土塙実測図(第1号土塙・第2号土塙)	(23)
第10図	第1号塚土塙実測図(第3号土塙・第4号土塙)	(24)
第11図	第1号塚土塙実測図(第5号土塙・第6号土塙)	(25)
第12図	第1号塚土塙実測図(第7号土塙・第8号土塙)	(26)
第13図	第1号塚土塙実測図(第9号土塙・第10号土塙・第11号土塙)	(27)
第14図	第1号塚出土遺物	(19)
第15図	第1号塚出土遺物(その他の遺物)	(19)
第16図	第2号墳墳丘実測図および南北土層断面図	(29)
第17図	第2号塚内部主体実測図	(30)
第18図	第2号塚出土遺物	(30)
第19図	第3号墳墳丘実測図	(35)
第20図	第3号塚土層断面図	(36)
第21図	第3号墳墳頂下土塙実測図	(37)
第22図	第3号塚内部主体実測図	(38)
第23図	第3号塚内部主体内出土ガラス製小玉実測図	(39)
第24図	第3号塚内部主体内出土ガラス製小玉および玉類実測図	(40)
第25図	第3号墳墳頂下土塙内出土直刀実測図	(37)
第26図	第3号塚内部主体内出土鉄製品実測図	(34)
第27図	第3号塚出土遺物実測図	(41)

表 目 次

- 第1表 村上古墳群内部主体・土塁計測値一覧表 (47)
第2表 村上古墳群第3号墳内部主体内出土ガラス製小玉計測値一覧 (48)

図 版 目 次

- 図版1 上 古墳群遠景（東方より眺む）
下 古墳群近景（東方より眺む） (51)
- 図版2 上 第1号塚全景（北方より眺む）
中 第1号塚全景（西方より眺む）
下 第1号塚全景（東方より眺む） (52)
- 図版3 上 第1号塚発掘調査状況
下 第1号塚南北土層状況北側上段（西方より眺む） (53)
- 図版4 上 第1号塚南北土層状況南側下段（東方より眺む）
下 第1号塚東西土層状況東側上段（南方より眺む） (54)
- 図版5 上 第1号塚南北土層状況北側下段（東方より眺む）
下 第1号塚第1号土塁（西方より眺む） (55)
- 図版6 上 第1号塚第1号土塁（北方より眺む）
下 第1号塚東側裾部土塁群（北方より眺む） (56)
- 図版7 上 第1号塚東側裾部土塁群（南方より眺む）
下 第1号塚南東裾部土塁群 (57)
- 図版8 上 第1号塚東側裾部土塁群（北方より眺む）
下 第1号塚南側裾部土塁群（西方より眺む） (58)
- 図版9 第1号塚第2・3・4・5・6号土塁 (59)
- 図版10 第1号塚第7・8・9・10・11号土塁 (60)
- 図版11 第1号塚出土遺物および出土状況 (61)
- 図版12 第1号塚出土遺物（その他の遺物） (62)
- 図版13 上 第2号塚全景（第1号塚より眺む）
下 第2号塚南北土層状況 (63)

図版14	上 第2号墳墳丘・内部主体位置状況	
	下 第2号墳内部主体.....	(64)
図版15	第2号墳内部主体完掘状況.....	(65)
図版16	上 第2号墳内部主体	
	下 第2号墳出土遺物.....	(66)
図版17	上 第3号墳全景(北方より眺む)	
	下 第3号墳全景(南方より眺む)	(67)
図版18	上 第3号墳発掘調査状況	
	下 第3号墳南北土層状況(西方より眺む)	(68)
図版19	上 第3号墳東西土層状況と内部主体(南東より眺む)	
	下 第3号墳内部主体完掘状況(北方より眺む)	(69)
図版20	第3号墳内部主体内玉類出土状況.....	(70)
図版21	第3号墳墳頂下土塚および直刀出土状況.....	(71)
図版22	上 第3号墳内部主体内出土鉄製品	
	下 第3号墳内部主体内出土ガラス製小玉.....	(72)
図版23	第3号墳墳頂下土塚内出土直刀および柄部拡大.....	(73)

第Ⅰ章 遺跡の位置と景観

村上古墳群は、京成電鉄勝田台駅の北方約1km、行政区画では千葉県八千代市村上字黒沢台に属し、地形的には下総台地のほぼ中央に位置している。

下総台地は北西に低く、南東に高い地勢を示しており、東京湾・江戸川・利根川・九十九里浜の4斜面から形成されている。これらの斜面は幅広い谷底をもつ多くの侵食谷が下刻されているが各斜面の分水界、関宿町一鎌ヶ谷市一土気町一富里町一栗本町一山田町一東庄町一鎌子市を結ぶ下総分水界付近には、習志野原・下志津原・八街町付近・三里塚付近など平坦な台地が形成されている。

本古墳群の位置する台地は習志野原・下志津原に隣接し、印旛沼に注ぐ新川とその支流勝田川、井野川、手綱川などにより樹枝状に開析されている支丘である。本古墳群は西方に新川とその後背湿地、南方に黒沢池を眼下に臨む標高28mの景勝の地に位置している。

本古墳群周辺の遺跡は、市内を貫流する新川とその支流により下刻された谷底を臨む台地上に分布している。市内の古墳時代遺跡については、土師遺跡（散布地）29ヶ所、高塚約140基が確認されている。高塚については未調査部分が多く、古墳、塚の判別は明確に区別することはできない。したがって、その基数も不明確であるが、古墳以外の塚と思われるものは行人塚など116基が確認されている。^{註1}

本古墳群と同一台地には、根上神社古墳（前方後円墳）、村上第1塚群・第2塚群、^{註2}村上供養塚などの古墳・塚が存在し、土師遺跡（散布地）では、黒沢台遺跡、込ノ内南部・北部遺跡等が知られている。^{註3}

以上のように村上古墳群（古墳2基・塚1基）の周辺には多くの同時代遺跡（高塚）が分布し、これらの遺跡との相互関係は、高塚の性格分類を含んだ、各遺跡の充分な調査とともに明らかにされていくであろう。

（野 中 和 夫）

- 註 (1) 『八千代市文化読本』第1集 八千代市教育委員会 昭和53年
(2) 『村上供養塚発掘調査報告書』上高野原発掘調査団 昭49年
(3) 『八千代市村上遺跡群』房総考古資料刊行会 昭51年
(4) 註2と同じ



1. 村上高塚群
2. 村上第1塚群
3. 村上供養塚
4. 村上第2塚群
5. 村上神社古墳
6. 辻ノ内南部遺跡
7. 辻田前たら遺跡
8. 辻ノ内北部遺跡
9. 上高野西部遺跡
10. 東京機械西側遺跡
11. 大塚遺跡
12. 宮内遺跡
13. 宮内北部遺跡
14. 宝喜作遺跡
15. 米本群集塚
16. 阿蘇中学校東側遺跡
17. 下高野庚申塚
18. 神野比浜塚遺跡
19. 保品栗谷古墳
20. 神野群集塚
21. 神野貝塚
22. 神野芝山古墳
23. 逆水塚
24. 幸手台古墳群
25. 半手台古墳群

真木野古墳 26, 真木野東部塚 27, 小池寺山遺跡 28, 小池群集塚 29, 神久保塚群 30, 島田台遺跡 31, 真木野遺跡 32, 島田塚群 33, 島田遺跡 34, 鹿野神社群集塚 35, 蟹島神社遺跡 36, 桑橋遺跡 37, 桑橋新田遺跡 38, 桑納古墳群 39, 麦丸遺跡 40, 尾崎北部遺跡 41, 吉橋城西方遺跡 42, 吉橋工团北側遺跡 43, 篠塚塚群 44, 尾崎群集塚 45, 麦丸台塚群 46, 向山塚群 47, 興真牛乳南側遺跡 48, 府塚 49, 莢田遺跡 50, 新山遺跡

発掘調査の概要

本古墳群の発掘調査は、昭和50年7月25日から8月27日までの約1ヶ月間に亘り実施した。

本古墳群は、昭和51年3月房総考古資料刊行会から報告された『八千代市村上遺跡群』の村上第1塚群に属する15基の高塚のうちの西端に位置する3基の高塚を称するものである。

第1塚群の15基のうちの9基についてはすでに報告されており、今回の調査実施以前に発掘調査によって、すでに消滅していた。また、本古墳群第1号塚は、昭和47年3月千葉県教育委員会により第1次発掘調査が実施され、「八千代市村上所在古墳発掘調査概報」として昭和48年3月に報告されている。

今回の調査は、未調査分6基のうち古墳群西端に位置する2基と、すでに第1次調査が行なわれている第1号塚の計3基の高塚について発掘調査を実施した。また、調査に際して便宜上南側から第1・2・3号墳とした。

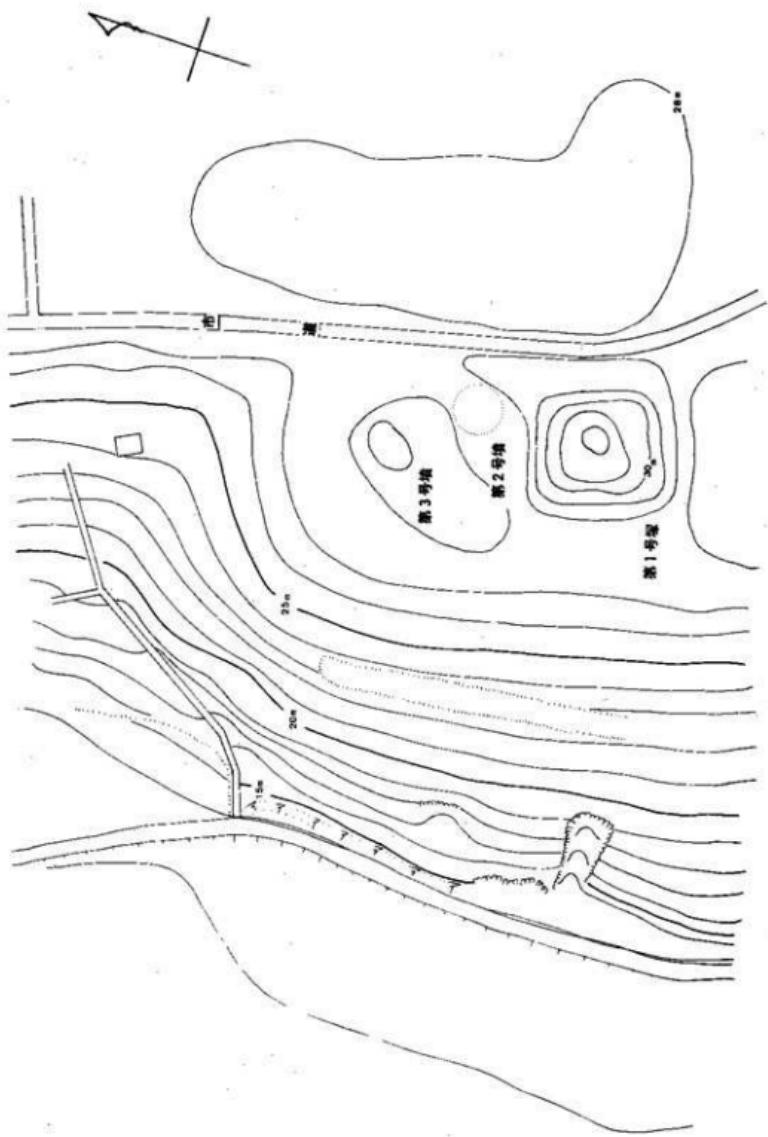
本古墳群の発掘調査は、先の調査結果を踏まえて、さらに、これらの高塚群との関連性とその性格を把握することを目的として実施した。なお、本古墳は、調査終了後、市道取付工事により消滅することを考慮し、発掘調査方法は全体にグリッドを設定し、封土を全面排土する方式を採用した。

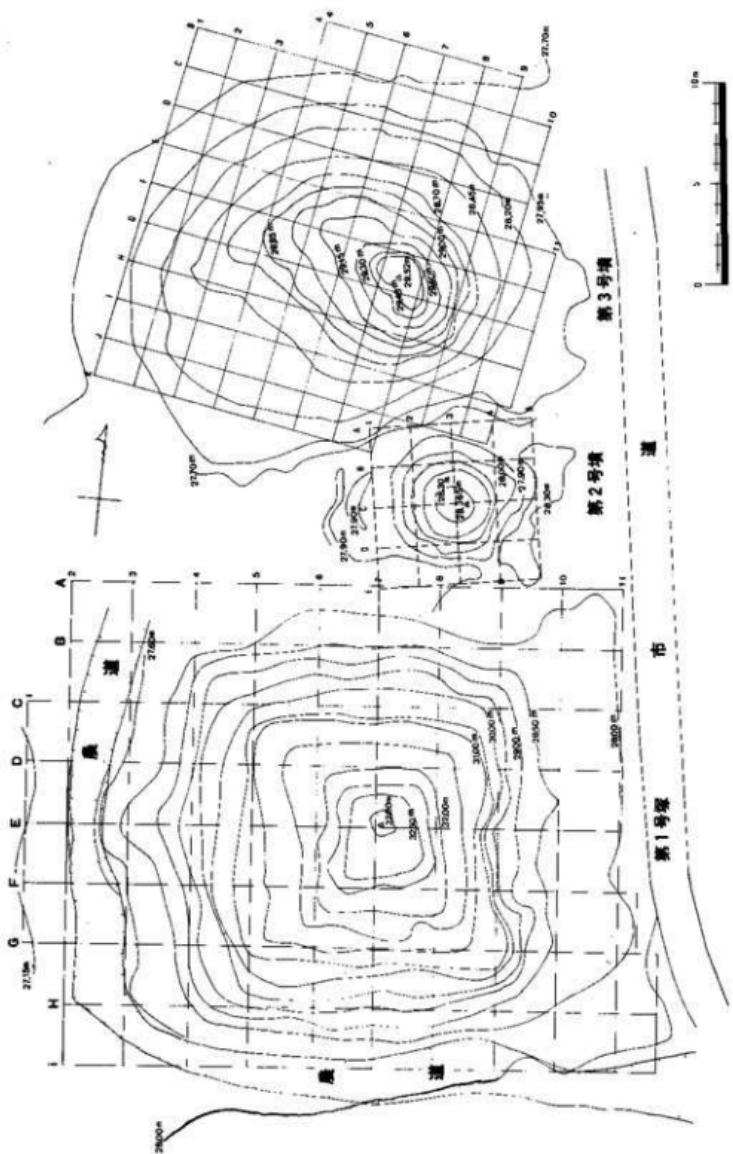
その結果、第1号塚においては封土中の内部施設のほか、塚の東辺から南辺にかけての裾部周辺から土括10基を確認することができた。更に、第2・3号墳は「特異な位置に内部主体を有する古墳」いわゆる「変則的古墳」に属するものであった。また、第3号墳では墳頂直下の封土中に副葬品埋納のための施設の存在を明らかにすることができた。

(関口武司)

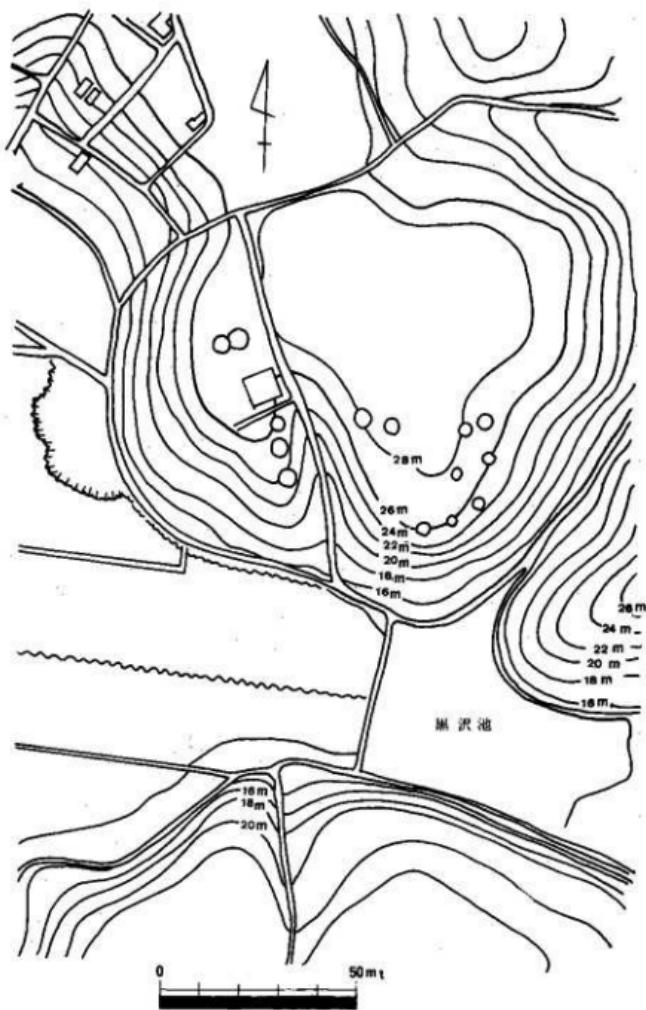
50m
0

第2图 村上古坟群地形测量图

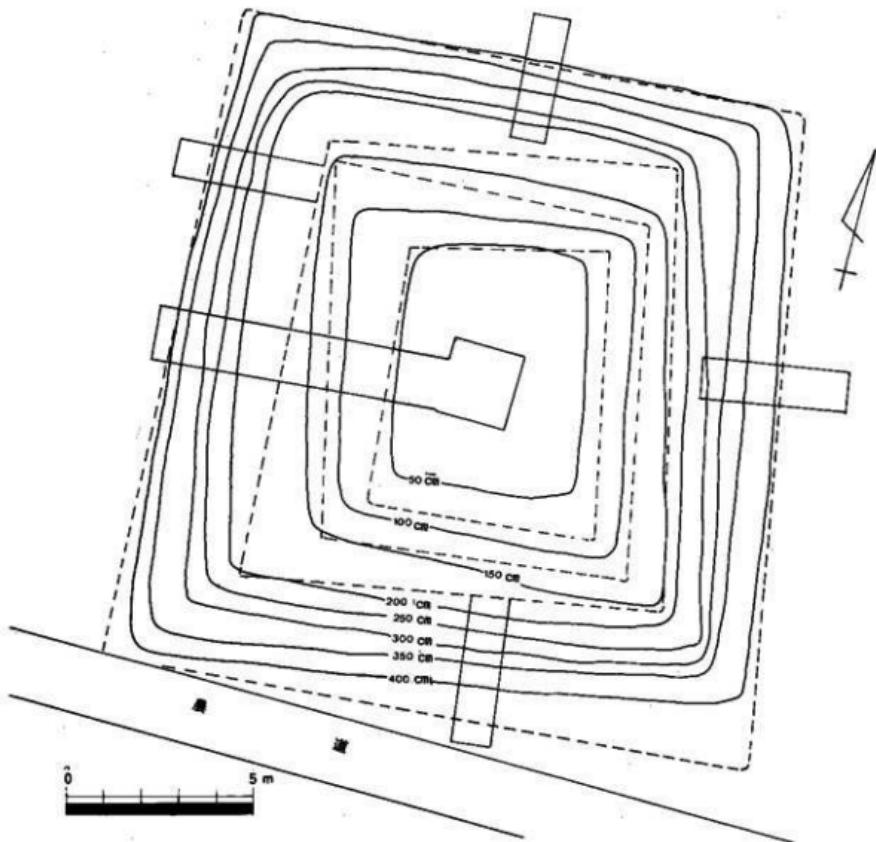




第3図 村上古墳群位置関係図



第4図 第一次調査分布図
「八千代市村上所在古墳発掘調査報告」千葉県教育委員会より



第5図 第一次調査、第1号墳墳丘実測図
『八千代市村上所在古墳発掘調査概報』千葉県教育委員会より

第Ⅱ章 遺跡各説および出土遺物説明

第1号塚

本塚は、古墳群中南に位置しており、また、村上第1塚群中最大の規模を有するものである。本塚は、すでに、千葉県教育委員会により昭和47年3月『八千代市村上所在古墳発掘調査概報』として報告されている。この報告書によると塚頂部の重要な部分が調査されており、「塚としての可能性よりも古墳としての可能性が大きいと言える。」と結論づけている。

今回の調査は、先の調査結果をふまえて実施した。

調査は、主軸をN-85°-Eとするグリッド(3m×3m)を設定し、グリッドは便宜上主軸に沿った東西ラインを北方からA~Iとし、また南北ラインを西方から1~12とした全79グリッドを設定し、全面撲土を目的とした平面発掘を行なった。

墳形および規模(擇図6)

本塚の形態および規模は、主軸をN-85°-Eを示す、一辺17m、高さ4.5mを計測する方形を呈している。また、西辺には一辺2mの矩形を呈する張出し部を有している。

封土の状態(擇図7・8)

本塚の構築状態は、塚の周囲の旧表土(黒色土)とローム土を約50~100cm程度掘り下げて方形台状に整形し基盤を築き、辺部に、堤を築いた後中央部を築きながら積み上げている。高さ1.9mの位置で、全体的に平坦にならし、中央部に方形の第1号土塙を構築し、その後、さらに盛土している。なお、四隅の稜部は、とくに、固くつきかためて塚の形状をととのえている。

内部主体(擇図9・10・11・12・13)

本塚に伴う遺構は、墳頂下約2.6mから検出された土塙1基と裾部の周辺から検出された10基の土塙である。

第1号土塙

本土塙は、墳丘内に位置するもので墳頂下2.6mの位置から検出されている。しかし、残念なことに、中央部は第1次調査の際のトレーナーにより大部分が破壊され消失している。その規模および形態は、長さ340cm、幅310cm、深さ54cmを測る矩形を呈している。主軸方位はN-80°-Eを示している。伴出遺物はない。

第2号土塙

本土塙は、東側裾部の北端から検出されたものである。その規模および形態は、長さ124cm、幅90cm、深さ36cmを計測する不整な長方形を呈している。主軸方位はN-13°-Wを示している。伴出遺物は認められなかった。

第3号土塙

本土塙は、東側裾部から検出されたものである。その規模および形態は、長さ254cm、幅66cm、深さ60cmを計測する長方形を呈している。主軸方位はN-5°-Wを示している。伴出遺物は覆土中より寛永通宝3点が検出された。

第4号土塙

本土塙は、東側裾部から検出されたものである。その規模および形態は、長さ354cm、幅92cm、深さ70cmを計測する長方形を呈している。主軸方位はN-70°-Wを示している。伴出遺物は認められなかった。

第5号土塙

本土塙は、東側裾部から検出されたものである。その規模および形態は、長さ332cm、幅72cm、深さ90cmを計測する長方形を呈している。主軸方位はN-16°-Wを示している。伴出遺物は認められなかった。

第6号土塙

本土塙は、東側裾部から検出されたものである。その規模および形態は、長さ294cm、幅102cm、深さ100cmを計測する長方形を呈している。主軸方位はN-8°-Wを示している。伴出遺物は認められなかった。

第7号土塙

本土塙は、東側裾部から検出されたものである。その規模および形態は、長さ314cm、幅56cm、深さ76cmを計測する長方形を呈している。主軸方位はN-11°-Wを示している。伴出遺物は認められなかった。

第8号土塙

本土塙は、東側裾部南端から検出されたものである。その規模および形態は、長さ276cm、幅74cm、深さ116cmを計測する長方形を呈している。主軸方位はN-6°-Wを示している。伴出遺物は認められなかった。

第9号土塙

本土塙は、南側裾部東端から検出されたものである。その規模および形態は、長さ256cm、幅128cm、深さ90cmを計測する不整な楕円形を呈している。主軸方位はN-82°Eを示している。作出遺物は認められなかった。

第10号土塙

本土塙は、第11号土塙と重複関係にあり、第11号土塙を切りこんで構築されている。その規模および形態は、長さ214cm、幅106cm、深さ68cmを計測する長方形を呈している。主軸方位はN-83°Eを示している。

第11号土塙

本土塙は、第10号土塙と重複関係にあり、第10号土塙により切りこまれている。その規模および形態は、長さ204cm、幅約130cm、深さ70cmを計測する不整な楕円形を呈している。主軸方位はN-83°Eを示している。

(高橋正敏)

遺物（擇図14）

本塙に伴うと考えられる出土遺物は寛永通宝のみで、墳頂部下と東側裾部付近から各1枚と第3号土塙の覆土中から3枚の計5枚が検出されている。

1は、墳頂部の第1次調査の際の埋灰土中から検出されたもので、コ頭通無背で「寛」、「永」の2字に特徴がある。背縁は手ずれのためかほとんど磨滅してなめらかになっている。

2は、東側裾部付近から検出されたもので、コ頭通無背で「永」の字に特徴がある。

3・4・5は、第3号土塙内から検出されたものである。

3は、コ頭通無背のもので細字で書かれているのが特徴である。

4は、マ頭通無背のもので「永」の字の最終割が尾を引く特徴をよくあらわしている。

5は、破片であるが「宝」の字の前足が上へ挑ねる特徴をもっている。

これらの寛永通宝はいづれも江戸時代中期に鋳造されたものと考えられる。従って、その使用は江戸時代中期またはそれ以降とすることが出来るであろう。そうすると、第1号塙および第1号塙に伴う土塙の構築をほぼこの時期に比定して大きな誤りはないであろう。

その他の遺物（擇図15）

その他の遺物としては、いづれも封土内からのもので約60片の土器類が検出されている。

6は、壺の頸部で白灰色の須恵質で釉がかかっている。第1号土塙南西コーナーから検出されたものであり、封土内から検出されたものと接合するところから、第1号土塙内へ流入したものと考えられる。

7は、壺の口辺部で灰白色の須恵質で輪がかかっている。

8は、土師器で杯身である。

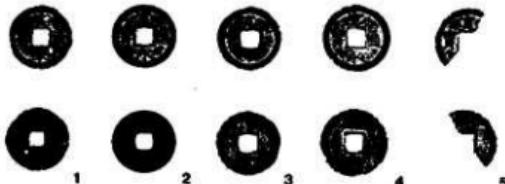
9は、土師器底部の杯身と考えられるが底部には糸切痕を有している。

10・11・12は、縄文式土器で撚糸文系の土器である。

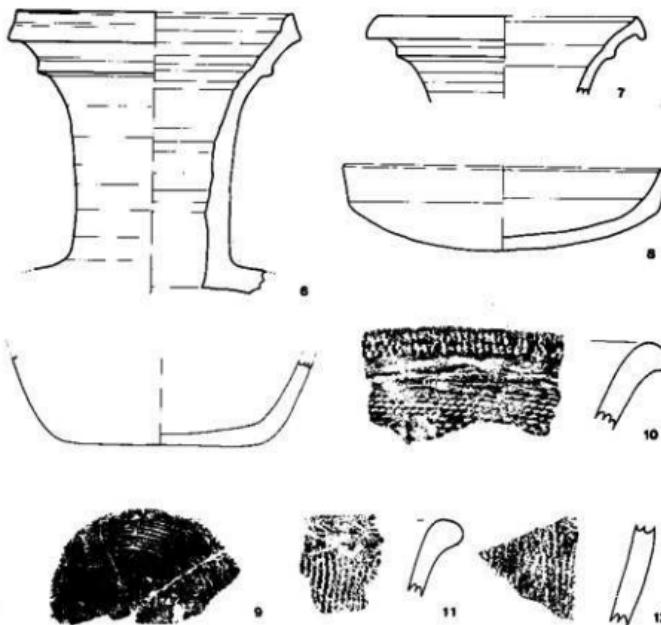
その他、注目されることは、第1号塚の封土内から検出された須恵器片と第3号墳墳頂部付近下

の封土中から検出された大甕片と接合するものも少なくないことがである。このことは第1号塚と第3号墳とは構築時期に差はあるが、築造に際して、同一場所から盛土を求めたことが考えられる。

(竹石健一)

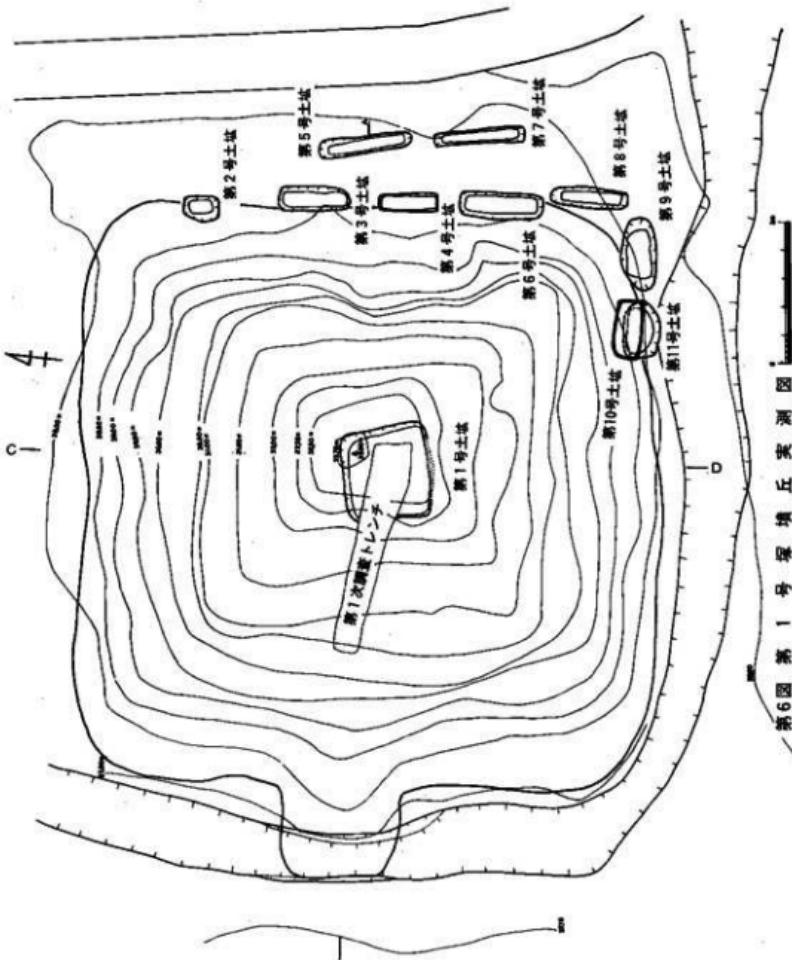


第14図 第1号塚出土遺物



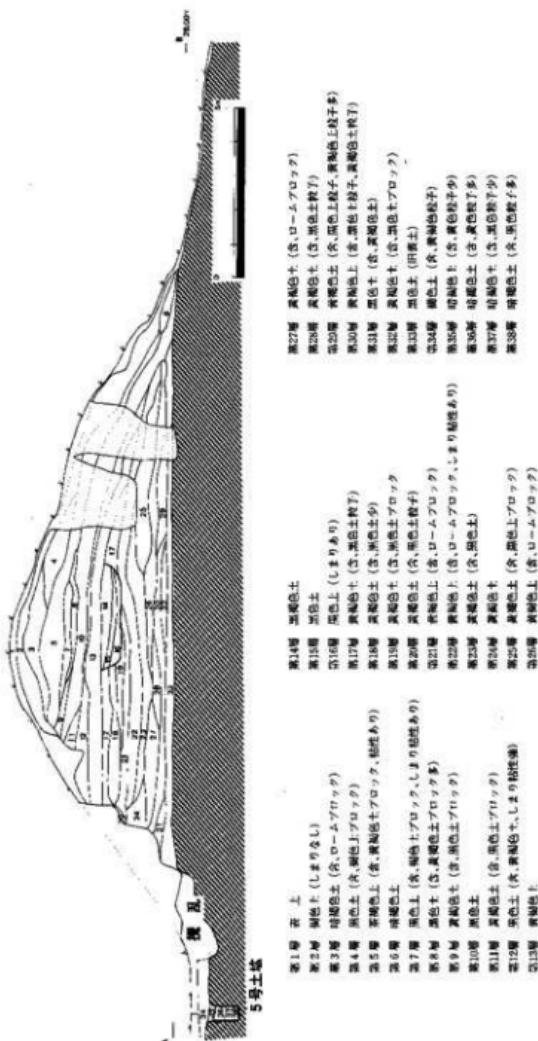
第15図 第1号塚出土遺物（その他の遺物）

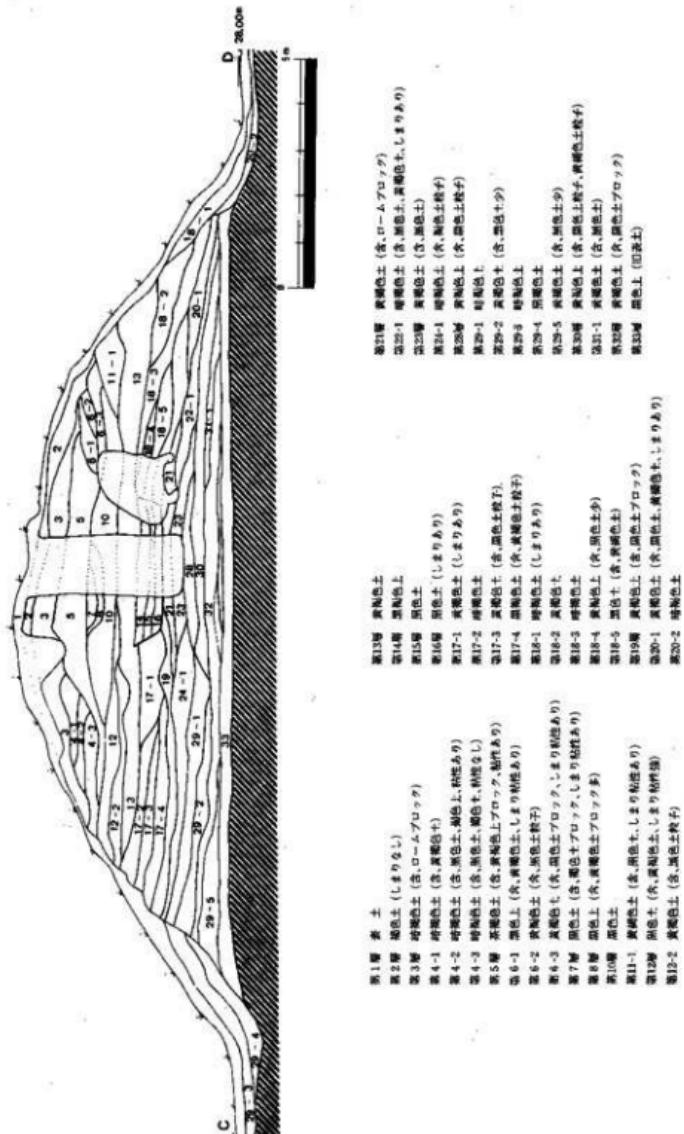
0 5cm



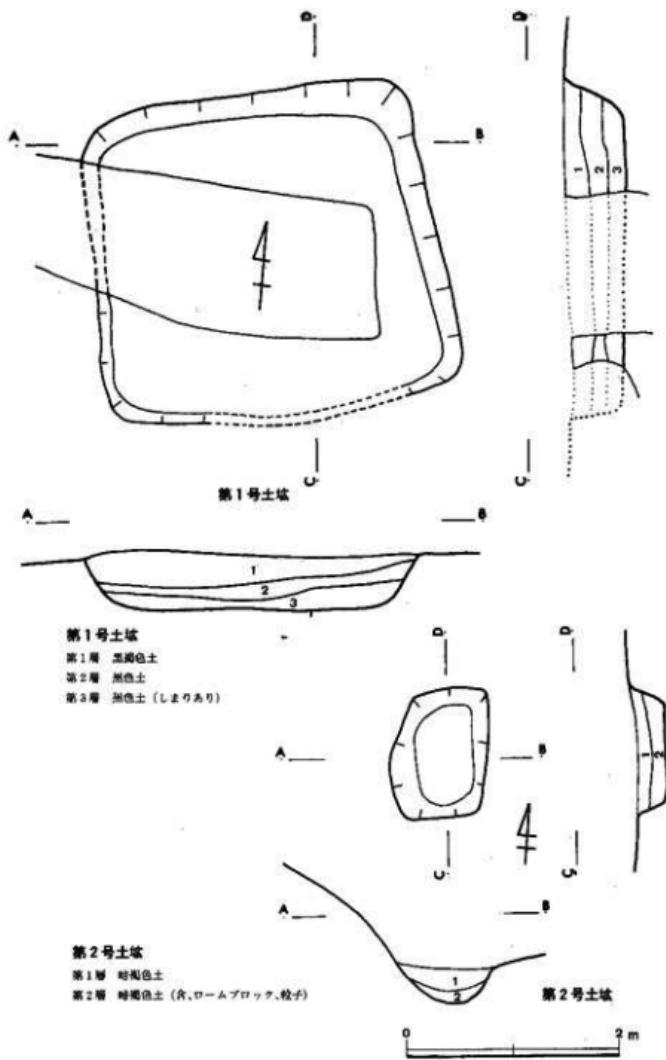
第6圖 第1號墳丘測量圖

第7図 第1号東西土層断面図



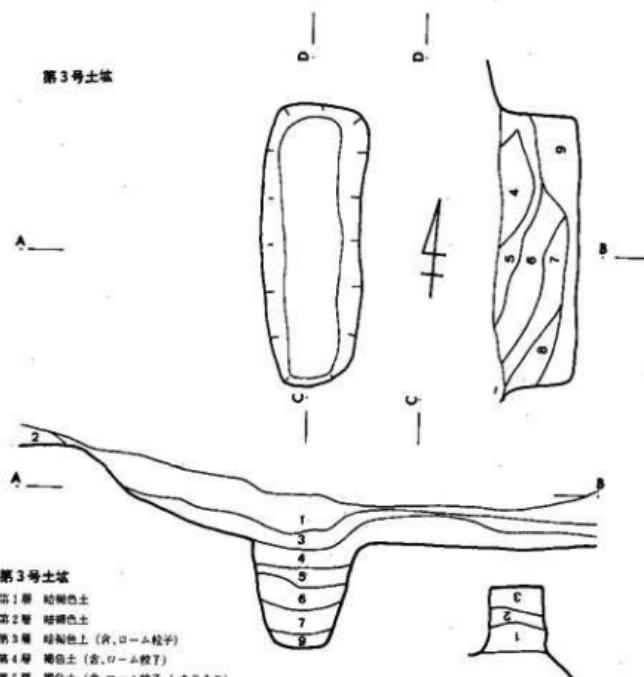


第8図 第1号探査北土壤断面図



第9図 第1号塚土塁実測図（第1号土塁・第2号土塁）

第3号土塙

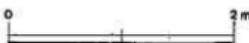


第3号土塙

- 第1層 粘質色土
- 第2層 塗褐色土 (含、ローム粒子)
- 第3層 暗褐色土 (含、ローム粒子)
- 第4層 塗褐色土 (含、ローム粒子)
- 第5層 黑褐色土 (含、ローム粒子、しまりあり)
- 第6層 塗褐色土 (含、黄色粒子)
- 第7層 塗褐色土 (含、ロームブロック)
- 第8層 黑褐色土 (含、ローム粒子)
- 第9層 黑褐色土 (含、ローム粒子多)

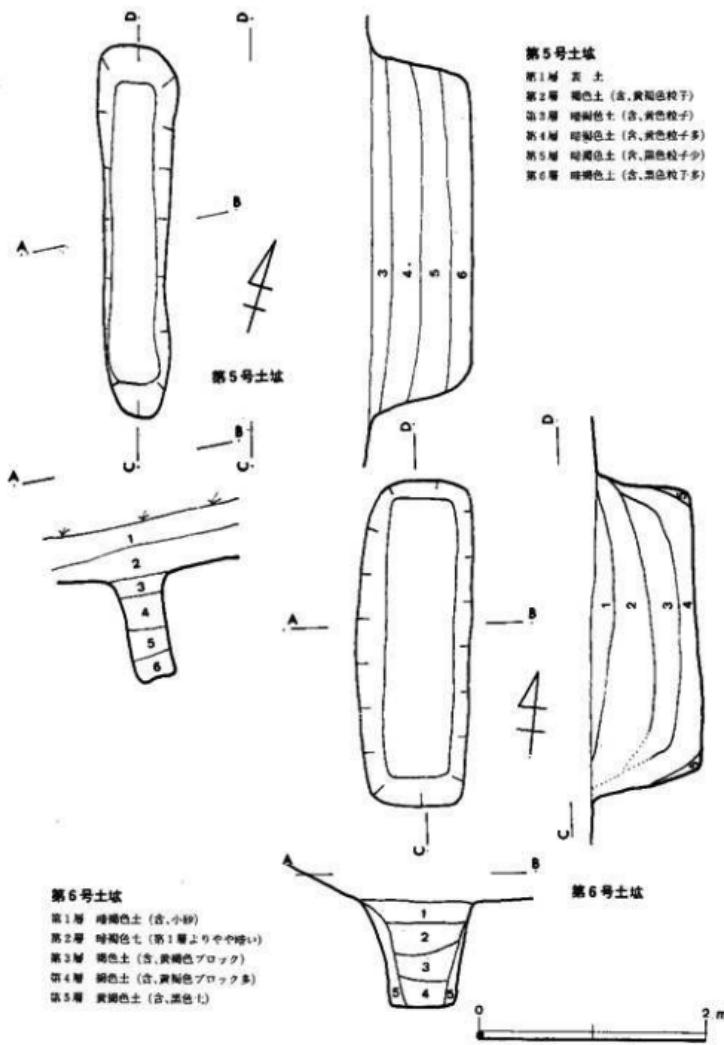
第4号土塙

- 第1層 塗褐色土 (含、ローム粒子)
- 第2層 塗褐色土 (含、ローム粒子多)
- 第3層 塗褐色土 (含、ロームブロック)

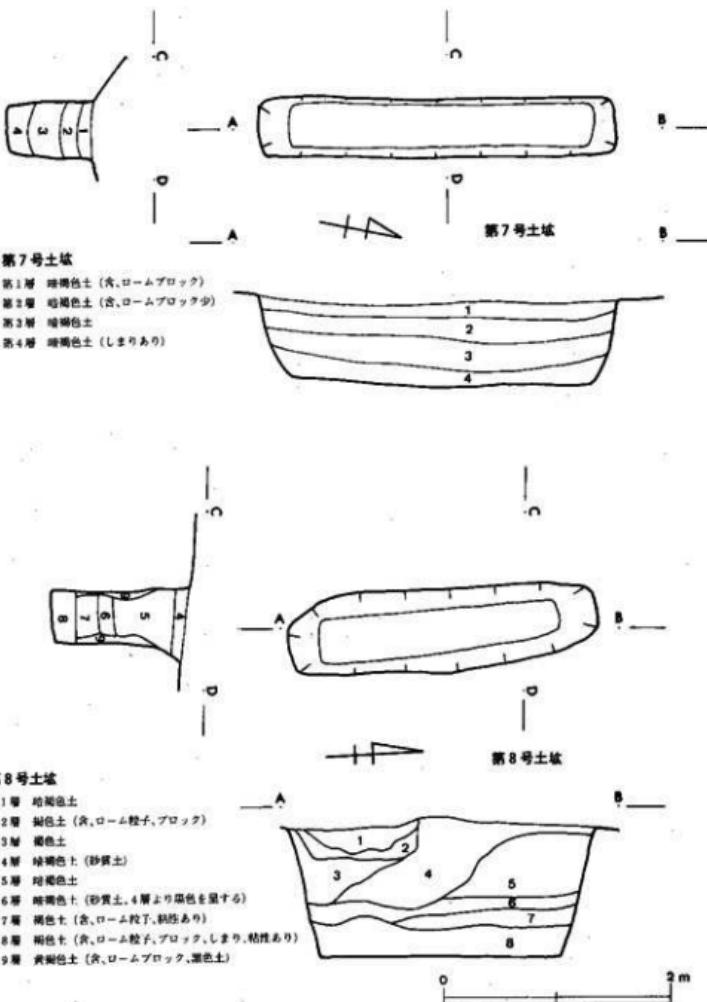


第4号土塙

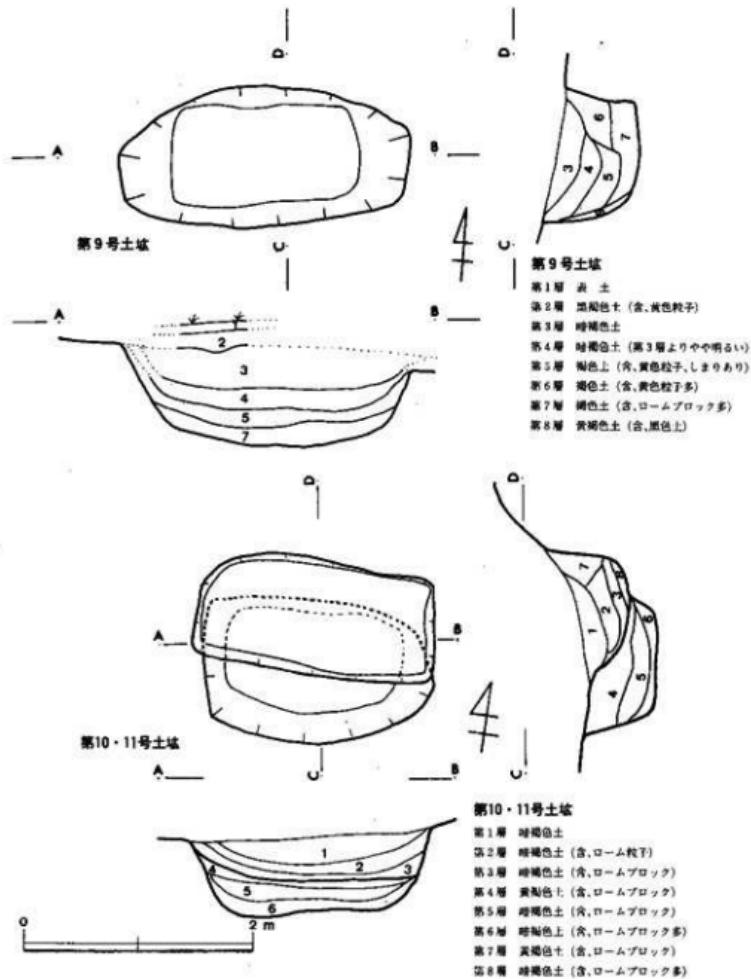
第10図 第1号塚土塙実測図 (第3号土塙・第4号土塙)



第11図 第1号塚土塚実測図（第5号土塚・第6号土塚）



第12図 第1号塙土塁実測図（第7号土塁・第8号土塁）



第13図 第1号塙土塁実測図 (第9号土塁・第10号土塁・第11号土塁)

第2号墳

本古墳は第1号墳の北約3m、第3号墳の南側にほとんど接して位置している。

本古墳の調査は、主軸をほぼ東西のN-81°-Eとする2m四方のグリッドを設定して行なったもので、グリッドは、便宜上、上軸に沿った東西ラインについては、北方からA-Eとし、また、南北ラインについては、西方から1~5と名付け、全体で16グリッドを設定し、全面排土を目的とした平面発掘を行なった。

墳形および規模（挿図16）

本古墳は当所その形状よりみて古墳構築時の原形を失っているかのように思われたが、調査の結果、その規模、直徑約4.0m、高さ0.4mを計測する小円墳であることが確認された。また、本墳には周溝などの外部施設は全く認められなかった。

封土の状態（挿図16）

本古墳は基盤をローム漸移層とし、この上に周囲の褐色土をかき集めて盛土したものである。また、封土の状態は、軟弱であり良好ではない。

内部主体（挿図17）

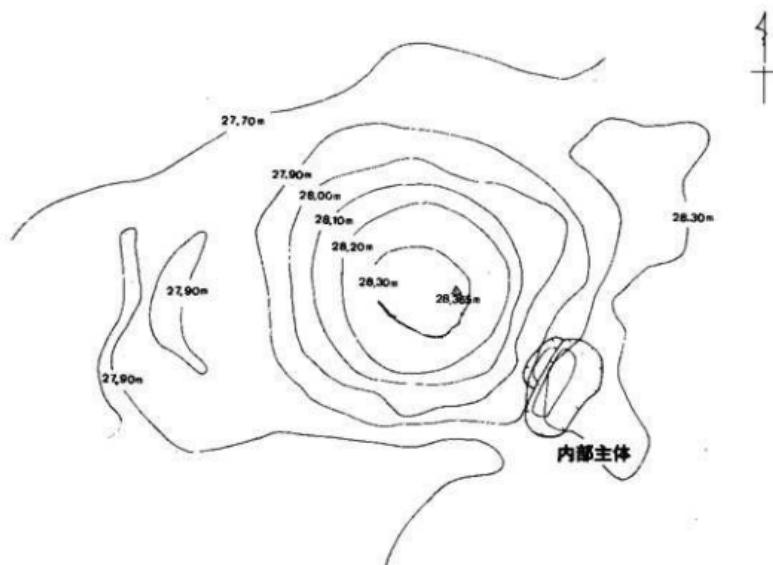
本古墳の内部主体は、墳丘南東側部から検出された土塙墓である。その規模は、長さ2.1m、幅1.0m、深さ0.6mを計測する。主軸方位はN-29°-Eを示している。

この土塙内部には、木棺を直葬したものと考えられる。また、埋納するに際しては荒掘した土塙内を一担水平に整え、しかも、西側に偏して埋置したものと思われる。

遺物（挿図18）

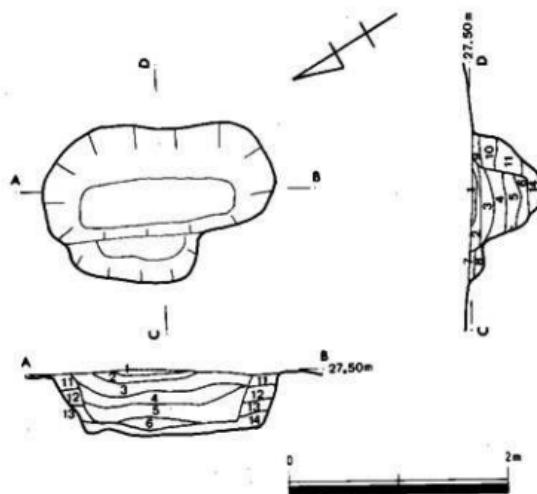
本古墳に伴なう遺物は検出されなかつたが、封土中からは、須恵器小片5個と砥石1個が検出されている。

（関口武司）



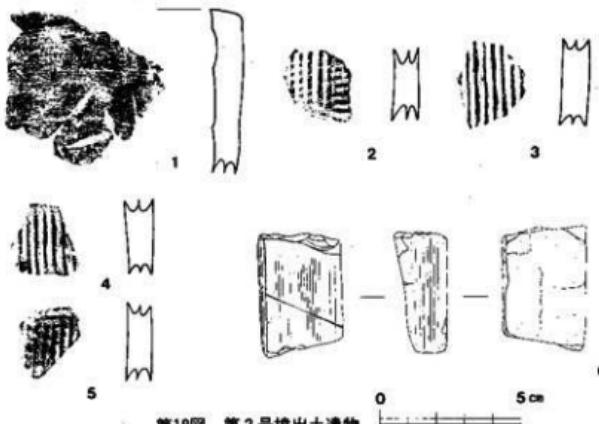
第1層 黒土	第9層 黄褐色土（ローム粒子含む）
第2層 黄褐色土（含、黑色粒子多）	第10層 墓園色土（しまりなし）
第3層 黄褐色土（含、ローム粒子）	第11層 墓園色土（しまりあり）
第4層 黄褐色土（含、ローム粒子多、しまりあり）	第12層 黑色土（旧表土）
第5層 黄褐色土（含、ローム粒子）	第13層 黄褐色土（しまりなし）
第6層 黄褐色土（ローム粒子多い）	第14層 黄褐色土（ロームブロック含む）
第7層 黄褐色土（ロームブロック含む）	第15層 黄褐色土（しまり、粘性あり）
第8層 黄褐色土（ロームブロック含む）	

第16図 第2号填境丘実測図および南北土層断面図



- 第1層 暗褐色土（しまりなし）
 第2層 暗褐色土（含、黄色土粒子、粘性あり）
 第3層 黒褐色土（含、黄色土粒子、粘性あり）
 第4層 暗褐色土（含、ローム粒子、粘性あり）
 第5層 暗褐色土（含、砂質状ローム小ブロック）
 第6層 暗褐色土（含、ローム粒子、褐色土粒子）
 第7層 暗褐色土（含、ローム粒子多量）
 第8層 高樹色土（含、ローム粒子、しまりあり）
 第9層 暗褐色土（含、黄色土粒子、柔軟J.粒子、粘性あり）
 第10層 暗褐色土（含、黄色土粒子、黑色土粒子、粘性強い）
 第11層 暗褐色土（含、ローム粒子、黑色土粒子、しまり多少あり）
 第12層 暗褐色土（含、ローム粒子、黑色土粒子、しまり軽度あり）
 第13層 暗褐色土（含、砂質状ローム粒子）
 第14層 暗褐色土（含、砂質状ローム粒子、しまりあり）

第17図 第2号墳内部主体実測図



第18図 第2号墳出土遺物

第3号墳

本古墳は、古墳群の中で最も北端に位置し、第2号墳とほとんど接触して存在している。

本古墳の調査は、主軸をほぼ東西のN—79°—Wとする2m四方のグリッドを設定して行なったもので、グリッドは、便宜上、主軸に沿った東西ラインについては、北方からA～Kとし、また、南北ラインについては、西方から1～11と名付け、全体で88グリッドを設定し、全面排土を目的とした平面発掘を行なった。

墳形および規模（挿図19）

本古墳は、墳頂部が墳丘の東寄りに偏った部分に位置し、西方に向って漸次緩傾斜をもつ不整な円墳である。

その規模は、Fライン（東西）で13.8m、7ライン（南北）で11.0m、墳麓から墳頂部までの高さ1.6mを測る。また、本古墳には周溝は認められなかった。

封土の状態（挿図20）

本古墳は、旧表土（黒色土）を平面ほぼ不整円形に整形し、それを基盤として、その上に周囲の土をかき集めて東西両端に盛土し、次に、中央部に盛土し、ここで一扣整地し、再び、大きく盛土し、墳丘を構築している。

内部主体（挿図22）

本古墳の内部主体は、墳丘の南東裾部から検出された一種の土塙墓である。その規模は、長さ2.20m、幅1.03m、深さ0.4～0.6mを計測する。主軸の方位はN—32°—Eを示している。

本土塙は、床面を荒掘した後、暗褐色土を貼り、その上に、厚さ5～10cm程度に粘土・黒雲母片岩を敷いて床面を構築している。さらに、四壁面にも同様の構築状態が認められている。特に、四隅には、粘土塊が置かれており、木棺の安定を考慮したものと思われる。また、壁の周囲には排水のためか溝を配している。

内部主体内からの遺物の出土状況は、鉄製品・玉類をはじめ北東部に集中して検出されている。ことにガラス製小玉については、棺内の北東部にその多くが集中して認められるが、土塙（棺）内外の広い範囲から検出されており、その出土レベルにも差異が認められる。しかし、出土地点をおさえることができたものから判断すると土塙内覆土の上層の第7層、第9層に集中していることがうかがわれる。

遺構（擲図21・22）

本古墳に伴う遺構は、内部主体（遺骸埋葬施設）の他、墳頂部直下から検出された副葬品埋納のためのものと思われる小規模な土塙がある。

この小土塙は、墳頂下約80cmの位置から検出されたもので、長さ1.38m、幅約0.4m、深さ約0.2mの規模を有する長方形状を呈しており、主軸の方針はN-46°-Eを指している。この小土塙内の東側からは直刀が検出されている。この直刀の出土状態には注目すべき点が認められている。それは刀先を上に向け（約50°）埋納されていることである。

遺物

本古墳からの出土遺物は、内部主体（遺骸埋葬施設）の内外からガラス製小玉168点（完形160点、破片8点）、メノウ製勾玉2点、白色小玉1点、刀子1点、鉄鎌4点、鉄製品1点が検出され、さらに、墳頂部の副葬品埋納施設と思われる土塙内から直刀1点が検出されている。また、その他、封土中から須恵器片約40片が検出されている。

ガラス製小玉（擲図23・24）

ガラス製小玉を便宜的に偏平なものを（A類）、橢円形のものを（B類）、円形またはそれに近いものを（C類）、また、筒状のものを（D類）として4類に分け、さらに、孔のあけ方の状態により細分した。まず、1方向から孔をあけたものを（1）、「V字状」のものを（2）、そして両方向から孔をあけた、所謂「X字状」のものを（3）として3種類に細分した。

A-1に属するものは、35・71・78・80・92・94・103・120・121・134・135・136・139・157・158・159の計16点である。

A-2に属するものは、7・19・29・36・40・44・48・49・50・51・52・68・73・83・84・85・87・88・89・91・93・95・96・110・127・128・131・138・140・143・145・149・154の計33点である。

A-3に属するものは、3・27・30・41・62・129の計6点である。

B-1に属するものは、6・12・15・55・58・60・65・75・76・82・99・102・105・108・116・118・119・125・132・137・142・146の計22点である。

B-2に属するものは、1・4・5・8・10・14・17・22・23・24・25・26・31・33・39・43・45・46・47・56・61・67・69・74・77・86・104・106・107・109・111・112・113・114・117・123・124・133・144・148・150・155の計42点である。

B-3に属するものは、20の1点のみである。

C-1に属するものは、32・38・53・66の計4点である。

C-2に属するものは、2・9・13・34・37・42・54・57・59・63・64・72・100・122・153・156・160の計17点である。

D-1に属するものは、28・70・79・81・90・101・115・126・130・147・151・152の計12点である。

D-2に属するものは、11・16・18・21・97・98・144の計7点である。

以上のような分類結果となったが、全体の比率では、A類は55点で34.4%、B類は65点で40.6%、C類は21点で13.0%、D類は19点で11.9%を占めている。したがって、A・B類が全体の75%をしめ、孔のあけ方も一方向からのものが全体の96%という結果を示している。

また、これらのガラス製小玉は、青色を基調とするものが大部分を占めているが、なかには黄緑色を呈するものもある。いづれも良質のものが多く、風化あまりうけていない。

その他の玉類 (擇図 24)

169は、白色を呈する小玉で手に触れると白色の粉が付着する。材質は不明である。

170・171は、メノウ製の勾玉で、いづれも表面は粗雑な加工を加えている。また、孔は一方向からあけており、貫通しない状態で打ちぬいたものと考えられ、他表面にその痕跡を残している。

鉄製品 (擇図 26)

172は、墳頂部下に埋納されていた直刀である。全長38.5cm(身丈29.2cm、柄9.3cm)、身幅3.3cm、柄幅2.6cmを計測する。直刀は身丈半分程度の所から切先にかけて約2°の角度をもって逆っている。柄の部分には木質部が明瞭に残存している。

173～178は、いづれも内部主体(土塙)内部から検出された鉄製品である。

173は、刀子であり、その全長は9.3cm(身丈5.0cm、柄4.3cm)、身柄1.1cm、柄幅0.9cmを計測する。身と柄の境には突起を設けている。また、柄の部分には、比較的良好に木質部が残存している。

174は、鉄鎌で刃部を欠失している。尖根式の鉄鎌と思われる。

175は、鉄鎌の柄部と思われるが詳細は不明である。現存部分は全体木質部で覆われており、一部分に黒色で光沢のある物質が付着しているのが認められる。

176は、尖根式の鉄鎌の刃部で下半部を欠失している。

177は、平根式の鉄鎌で、刃先端部を欠失している。現存長さ2.0cm、幅1.7cmを計測する。中央部から柄の部分にかけて鉄鎌の中央部をはさむように木質部が残存している。

178は、有茎の平根式鉄鎌であるが、腐蝕が著しい。長さ3.7cm、(柄部0.6cm)、幅2.4cmを計測する。木質部は鉄鎌の中央部をはさむように残存している。

土器 (擇図 27)

179・180は、墳頂部を中心に検出された約40片の須恵器の大甕片の一部である。出土破片から、これらの大甕は径約50cm程度のもので、総数2～3個体分と推定される。

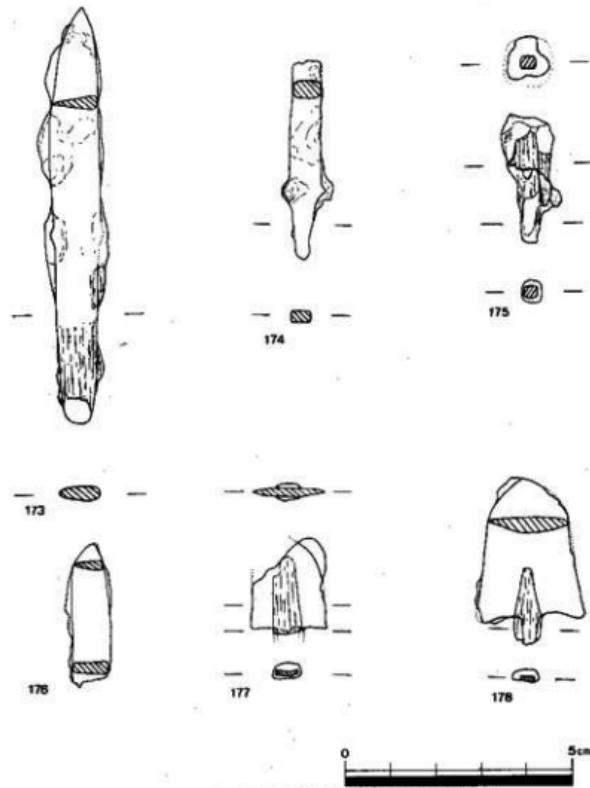
その他の遺物 (挿図 27)

いづれも盛土中から検出されたものである。

181は、繩文式土器で撫糸文系土器の腹部片である。

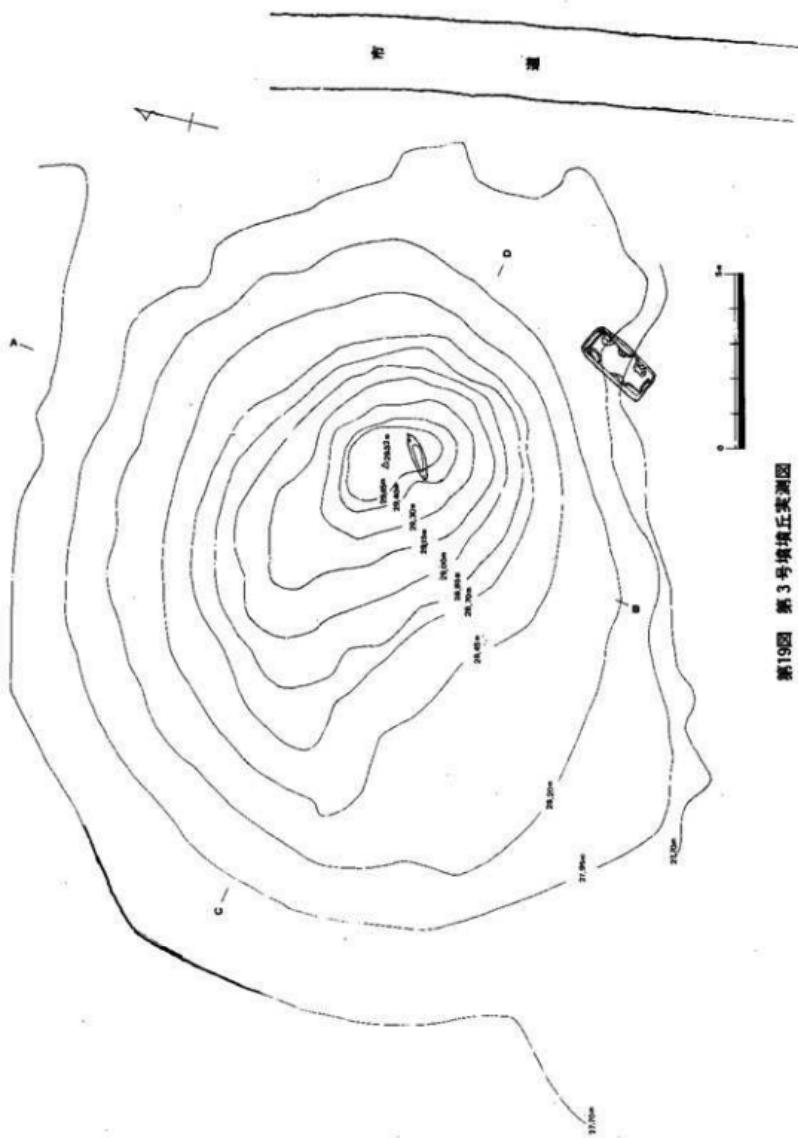
182は、砥石で材質は石灰岩質のものである。長さ 7.3 cm、幅 2.7 cm、厚さ 2.5 cmを測り、長方形を呈している。表面の使用痕にS字状のものが認められるところから、曲った金属を研いだことが推察される。また、両側面、裏面、上面にも沈線状の使用痕が十数条認められる。

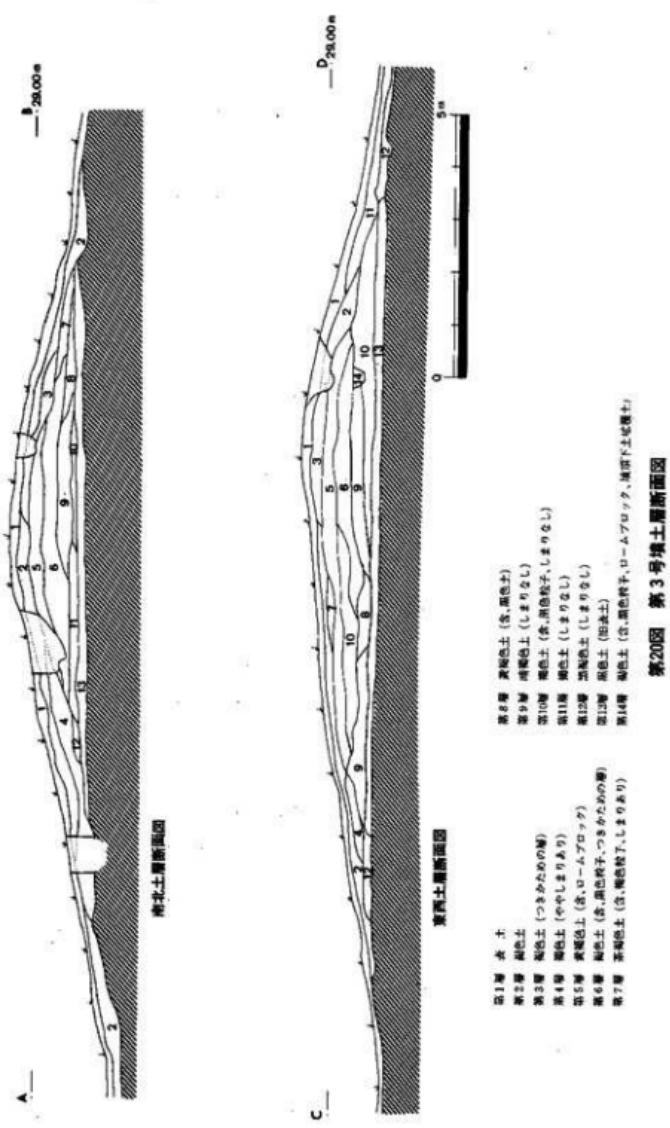
(関・口・武・司)



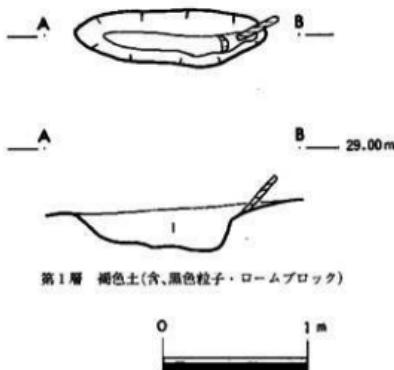
第26図 第3号墳内部主体内出土鉄製品実測図

第19圖 第3号墳丘測量圖

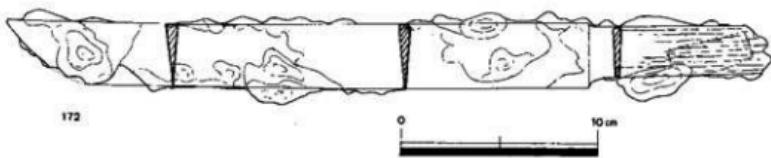




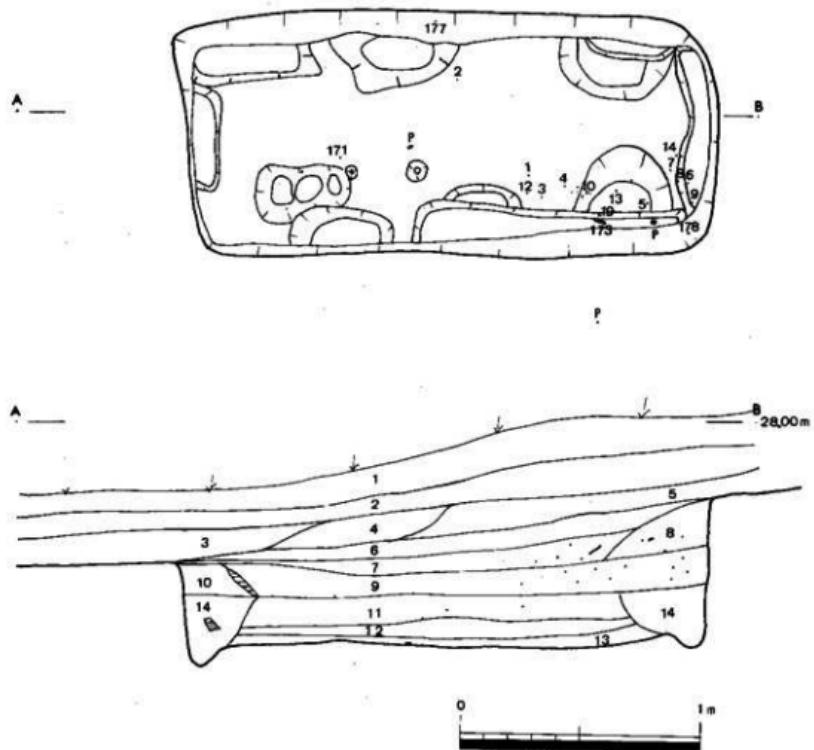
第20図 第3号地盤土壤断面図



第21図 第3号墳墳頂下土塙実測図



第25図 第3号墳墳頂下土塙内出土直刀実測図

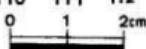


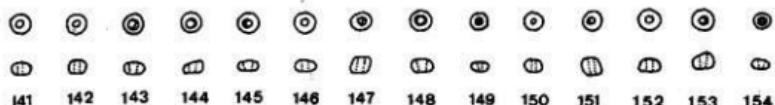
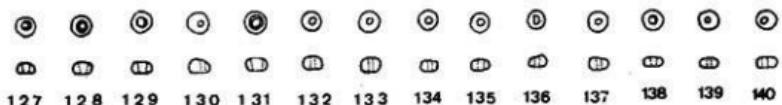
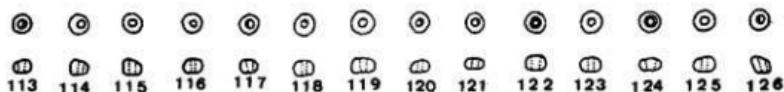
- | | |
|---------------------------|-----------------------------|
| 第1層 表土 | 第8層 黒褐色土(しまりあり) |
| 第2層 棕褐色土(含、黄色粒子) | 第9層 増殖色土(含、ロームブロック多) |
| 第3層 粘褐色土 | 第10層 增殖色土(含、ロームブロック多、しまりあり) |
| 第4層 增殖色土(3層よりやや暗く、しまりあり) | 第11層 增殖色土(含、粘土ブロック) |
| 第5層 增殖色土(含、黄色粒子) | 第12層 增殖色土(含、粘土ブロック多) |
| 第7層 增殖色土(含、ロームブロック) | 第13層 増殖色土(含、黄色粒子) |
| 第7層 粘褐色土(含、ロームブロック、しまりあり) | 第14層 増殖色土(含、粘土多) |

第22図 第3号墳内部主体実測図

◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
1 15	2 16	3 17	4 18	5 19	6 20	7 21	8 22	9 23	10 24	11 25	12 26	13 27	14 28
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
29 43	30 44	31 45	32 46	33 47	34 48	35 49	36 50	37 51	38 52	39 53	40 54	41 55	42 56
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
57 71	58 72	59 73	60 74	61 75	62 76	63 77	64 78	65 79	66 80	67 81	68 82	69 83	70 84
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
95 99	86 100	87 101	88 102	89 103	90 104	91 105	92 106	93 107	94 108	95 109	96 110	97 111	98 112

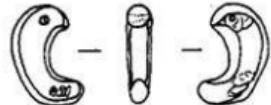
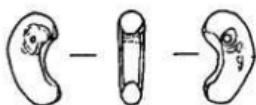
第23図 第3号墳内部主体内出土ガラス製小玉実測図



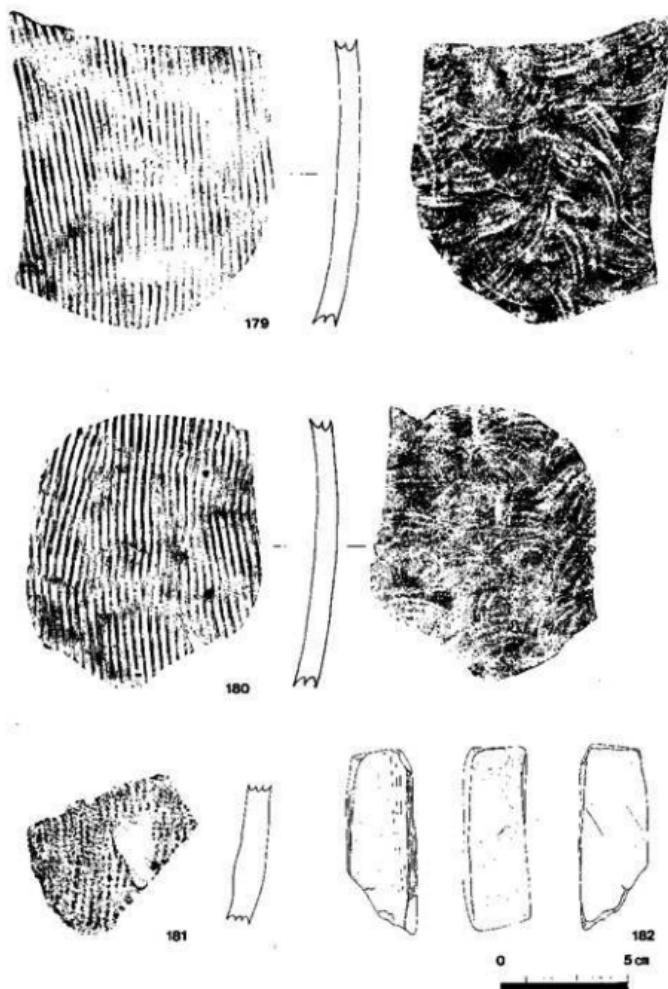


171

170



第24図 第3号墳内部主体内出土ガラス製小玉、および玉類実測図



第27図 第3号墳出土遺物実測図

第三章 考 察

村上古墳群は、「村上遺跡群」の第1塚群に属する15基の高塚のうち市道を挟んだ西端部に位置する6基の高塚を称するものである。

今回の調査は、6基のうち未調査分2基とすでに千葉県教育委員会より墳頂部の一部が調査されている1基(第1号塚)の計3基の高塚を対象に実施したものである。調査は、第1塚の調査結果を踏え、墳丘全体にグリッドを設定し平面発掘による盛土の全面排土方式で行なった。

その結果については、前章で報告したとおりである。

そこで、本古墳群の調査結果をもとに考察を加えるとともに、その問題点を提起し、先学諸氏からの御教示、御助言をたまわりたい所存である。

第1号塚

〈封土の状態〉

本塚の封土(盛土)の状態については、第II章でその詳細について述べたが、第1次調査の概報によると「古墳を流用して信仰の対象とする例は少なくない。周辺に分布する高さ1mに満たない小墳丘を考慮すれば、塚としての可能性よりも、古墳としての可能性の方がより大きいと言える。」と結論づけられている。

そこで、今回の調査は、前回の調査結果を踏えつつ、高塚の分布状況と規模から推定して、古墳の墳丘を利用し、さらに、古墳の上に盛土をして後世の塚を構築した可能性も充分考慮して細心の注意を払いつつ行なった。その結果、封土の土層断面などからは古墳の墳丘を利用した証左は得られず、むしろ当初から塚として構築されたものと判断されるにいたった。

また、墳丘測量の際、塚西辺の中央部付近に張り出し部の存在を確認したが、調査の結果も含めて本塚に伴うものと判断されるが、その性格については明らかにしえなかった。

〈遺構〉

本塚に伴う遺構は、墳頂下から検出された矩形を呈する土塙1基と東側裾部周辺から南側裾部周辺にかけて検出された長方形を呈する土塙10基である。

第1号土塙

墳頂下から検出された土塙で、第1次調査の際のトレンチにより、その中央部を含む大半が消失している。

第1次調査の報告によると墳頂下約3m付近から祥符通宝、天聖元宝、皇宋通宝、元豐通宝、

元祐通宝などの北宋銭が検出されている。今回の調査では、第1次調査のトレンチの埋戻し土中から寛永通宝1枚を検出している。二回にわたる調査からこれらの古銭は検出位置関係等から推定して、この土塙に伴う可能性が充分に考えられるが断定はできない。

第2号～第11号土塙

いづれも墳丘裾部から検出された土塙で、その平面形態は3種類に分類することができる。

A類—平面形態が不整形楕円形を呈するもの。（第9・11号土塙）

B類—平面形態が長方形を呈するもの。（第2・3・6・10号土塙）

C類—平面形態が長方形を呈し、B類と比較すると幅が極端に狭いもの。（第4・5・7・8号土塙）

これらの土塙の新旧関係は、幸いにも第10・11号土塙の切り合い関係で知ることが出来る。すなわち、第11号土塙を第10号土塙が切っており、第11号土塙（A類）が古く10号土塙（B類）が新しく構築されたことが明らかである。また、C類の一部は東側裾部の二列目、つまりより東側の墳丘から離れた位置に構築されていることから判断して、これらの土塙は、A類—B類—C類の順に構築されたものと考えられる。しかし、断定するに足る十分な材料はない。

（塙の構築年代）

本塙の構築年代については、その手懸となる遺物の明確な出土状態が得られず、明確な時期決定をすることができない。

たとえば、第1次調査において検出された北宋銭を本塙（第1号土塙）の伴出遺物とみるとならば、中世以降に構築されたと考えられるが、今回の調査では第1次調査の際のトレンチの埋戻し土中から寛永通宝が検出されており、もし、この寛永通宝が第1次調査で検出された北宋銭と共に伴関係にあるか、または本塙の伴出遺物とするならば、江戸時代中期以降に構築されたことが考えられる。

また、墳丘裾部周辺の土塙群の構築年代については、土塙群のうち、最も新しい時期に構築されたと思われるC類に属する第3号土塙内から3枚の寛永通宝が検出されていることから、すくなくとも、第3号土塙は、江戸時代中期以降に構築されたことが考えられる。したがって、これらの土塙群は、江戸中期以降に構築されたものと考えて大きな誤りはないであろう。

（塙の性格について）

塙は宗教的なものから伝説上のものまで含むと相当多種類におよぶが、一般的には、経塙・庚申塙・十三塙・行人塙・千人塙などがよく知られている。

本塙はこれらの塙のうち何に属するかは明確にしない。そこで、本塙の性格について、塙と土塙群との関係から検討するにあたり、(1)土塙群が3期に亘り断続的に構築された理由。(2) 土

塙内から寛永通宝が検出されたことの2点から考察してみたい。

まず、(2)の土塙内から古銭を検出した例では、昭和50年2月から3月にかけて竹石健二が調査主任として調査した熱海市・山畠遺跡（中・近世の墓塙群）がある。この山畠遺跡検出の墓塙群からは古銭を伴う例も少なくなかった。調査の結果、これらの古銭の性格は「六道銭」として死者を葬る際納したものであった。また、埋納に際して古銭の枚数も単に6枚という数にはこだわらず、2枚、3枚という例も相当数含まれていた。

このような知見からみて、本土塙群は墓塙であり、土塙内から検出された寛永通宝は「六道銭」の性格をもつものと考えられる。

つぎに、土塙の構築順序から考えると、まず最初に、墳丘の南裾付近のA類を構築し、次に東裾付近のB類を構築し、最後にこのB類より東側にC類が構築されたことが考えられる。さらに、これらの土塙群には第10号・第11号土塙を除いて重複関係が認められず、当時、何等か墓標的存在があったことも考えられるが、調査では明らかにしえなかつた。

以上のような事実から、本塙の性格は単なる信仰塙ではなく、墓塙群を伴なう供養塙的性格を有するものであろうことが推察される。

第2号塙・第3号塙

両古墳のもつ特異性は、内部主体の位置とともに、副葬品の出土状態に見ることができる。

〈内部主体について〉

両古墳における内部主体（遺骸埋葬施設）は通常とは異なって、特異な位置にある。つまり東南方向の墳丘裾部に位置している。一般的には古墳における内部主体は、その多くの場合、古墳の墳頂部およびその付近下（前方後円墳・帆立貝式古墳・双方中円墳などの場合は円形墳頂下）に位置しているのが通常のあり方である。

両古墳のような古墳について、市毛 熊氏は「変則的古墳」と称している。その概念について、市毛 熊氏は、

- (1) 内部施設が墳丘裾部に位置すること。
- (2) 内部施設は通常、半幅な板石を用いた箱式石棺であること。
- (3) 合葬（追葬）を普通とすること。
- (4) 群集墳を形成すること。
- (5) 東関東中央部に分布すること。

の5点をあげておられる。

また、竹石健二は「特異な位置に内部主体を有する古墳について」の論文中で変則的古墳について、⁽¹⁵⁾

- (1) 内部主体たる遺骸埋葬施設が古墳の墳頂下に位置しないもの。
- (2) 複数の遺骸埋葬施設が存する場合などは、その古墳本来の主たる内部主体が古墳墳頂

下の位置以外に存するもの。

の2点をあげている。

両者の見解の分かれるとこを整理すると、市毛氏は、東関東中央部に分布する群集墳中にあって、内部主体は墳丘裾部に箱式石棺として存在するものとして、細部にわたり検討した結果、地域的、時間的に、また内部主体の構造について限定したうえで変則的古墳をとらえておられる。一方、竹石の場合は、いわゆる変則的古墳を主たる内部主体が墳頂下以外に位置するものとしてとらえ、地域的、時間的、構造的に広範な範囲の中において、その性格をとらえようとするものであり、両者には視点の相違がうかがわれる。

所謂、「変則的古墳」についての研究は、昭和20年代の後半から30年代の初頭において輕部慈恩氏や平沢一久氏により指摘されたことに始まるが、研究の分野としては緒についたばかりである。その中にあって、市毛歎氏、杉山晋作氏、中村恵次氏、茂木雅博氏などの研究成果には見るべきものがある。今後の課題は、地域的にも時間的にも限定し、性急な判断や解決を計るものではなく、むしろ時間的にも地域的にも広く資料の収集と詳細なる分析を行ない、大和政権を含めた古墳時代の歴史的変遷の中で「変則的古墳」について、とらえていく必要があろうことを指摘しておきたい。

第2号・第3号墳はいずれも、所謂、「変則的古墳」の範中に属するものであり、その内部主体は、両者とも土塙内に木棺を安置したものである。所謂、「変則的古墳」の内部主体においては、木棺直葬の形態は比較的少なく、この点からも貴重な資料となるであろう。

〈副葬品および遺物の出土状態〉

副葬品の検出は第3号墳のみで、第2号墳からは検出されなかった。

第3号墳で、その出土状態がとくに注目されるのが墳頂部直下から検出された副葬品埋納施設で、この土塙内から直刀が切先を東方向に向けて立てかけられた状態で検出されたことである。従来、封土上における副葬品のあり方はあまり明確でなく、今回の調査で、そのあり方の一端を明らかにしたことは重要であり、直刀の出土状態など極めて貴重な発見といえよう。

また、墳頂部付近における須恵器大甕2・3個体分の破片の検出や内部主体内におけるガラス製小玉類は、あたかも人為的に、まき散らされたかの如き状態で検出されており、葬送儀礼・墓前祭祀のあり方にが曖昧を与えてくれているように思える。

〈古墳の築造時期〉

両古墳の築造時期は、第3号墳の内部主体内から検出された副葬品および副葬品のセット関係墳丘の規模等々から判断して、古墳時代後期に属するものと考えられる。

第2号・第3号墳の新旧関係については、挿図第16図の第2号墳上層断面図により第1号塚、第3号墳の相關関係を知ることができる。これによると、第3号墳は、旧表土（黒色土）および

ローム漸移層を不正円形に整形し墳丘の基盤としており、その上に周囲の旧表土と考えられる黒色土を積み上げており、一方、第2号墳は、ローム漸移層を墳丘の基盤としていることから、第3号墳を築造した後に、第2号墳を築造したものと考えられる。しかし、両古墳の時間的差はほとんどなかったものと考えられる。

(村上第1塚群における本古墳群の意義)

房総資料刊行会編による『村上遺跡群』は、本古墳群を含む第1塚群について報告している。その大要は、「本塚群における個々の塚は、所在位置、平面形、大きさ、盛土の状態等々にバラツキが認められる。とくに盛土の状態に関してはその感を強くする。塚群が一定の主旨に沿って構成されているとすれば、このバラツキの所産が何に由来するかは推定の域を脱し得ないと考えておきたい。また、塚の性格が把えられる様な遺構・遺物、あるいは在地の民俗・口伝も採集されなかつたので類例よりその性格と築造の年代観を推定すると、塚を兼ねて聖地とし、神仏を祀った民間信仰上の所産であると推定され、中・近世の所産と把えておきたい。」と結論づけておられる。また、本古墳群の第1号塚については、「村上第1塚群中の盟主的な存在である。」としている。

以上の調査報告をふまえながら、今回の調査結果からみた村上第1塚群について考えてみたい。本古墳群の第1号塚は萬塚群を伴う供養塚的性格を有するものと考えられ、第2号・第3号墳は、特異な位置に内部主体を有するいわゆる「変則的古墳」であり、その築造年代や性格的意義に相違が認められる。従って、すでに調査によって消失した村上第1塚群中の9基の高塚の中の大部分は、第2号・第3号墳と同様の所謂、「変則的古墳」であった可能性が極めて強いとすることができよう。

本古墳群を含めた村上第1塚群は、発掘調査によって、その8割がすでに消失している。幸にも、第1号塚の南側に3基の古墳が現存している。これらは、その規模・形態などからみて、第2号・第3号墳と同様の所謂「変則的古墳」である可能性が極めて強いものであるところから、今後、発掘調査の対象となつた場合は、今回の調査結果を十分に参考にすべきであろう。

おわりに、今回の調査により、村上第1塚群の性格の一端を明らかにすることができた。さらに、塚および古墳研究上にいくつかの貴重なる資料を加えることができた。その要因の一つとして、墳丘内外の広範囲にグリッドを設定し、封土の全面拂土による調査方法をあげることができよう。

(関 口 武 司)

註

- (1) 「村上遺跡群」 房総資料刊行会 昭49年
- (2) 「八千代市村上所在古墳発掘調査概報」 千葉県教育委員会 昭48年

- (3) 「山畠遺跡だより」山畠遺跡発掘調査団 昭50年
- (4) 市毛 熟「東国における墳丘裾に内部施設を有する古墳について」『古代』 昭48年
- (5) 竹石健二「特異な位置に内部主体を有する古墳について」『史叢』12・13合併号 昭44年
- (6) 軽部慈恩「千葉県山武郡板付不動塚古墳」『日本考古学年報』4 昭30年
- 軽部慈恩「千葉県山武郡燕木五号墳」『日本考古学年報』6 昭32年
- (7) 平沢一久「遺骸埋葬位置の特異な高塚墳墓についての一考察」『鎌田重雄先生還暦記念歴史学論叢』 昭44年

第1表 村上古墳群内部主体・土塙計測値一覧表

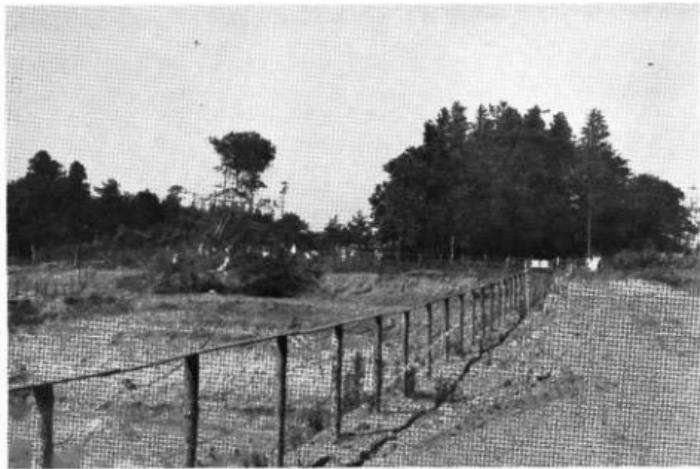
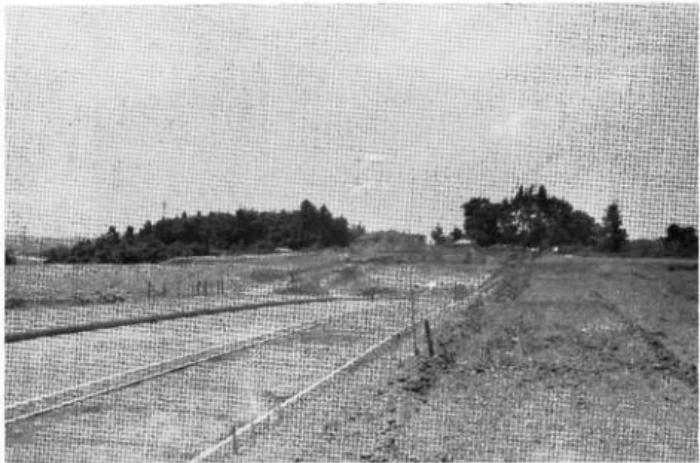
高塚名	造構名	規 模			主軸方位	出 上 遺 物
		長 さ	幅	深 さ		
1号墳	1号土塙・埴頂部	310 ~ 340	300 ~ 310	50 ~ 54	N-80°E	
	2号 東側裾部	116 ~ 124	74 ~ 90	32 ~ 32	N-13°W	
	3号 *	254	58 ~ 66	56 ~ 60	N-5°W	寛永酒甕
	4号 *	340 ~ 354	76 ~ 92	64 ~ 70	N-7°W	
	5号 *	320 ~ 332	54 ~ 72	86 ~ 90	N-16°W	
	6号 *	288 ~ 294	84 ~ 102	84 ~ 100	N-8°W	
	7号 *	314	52 ~ 56	72 ~ 76	N-11°W	
	8号 *	270 ~ 276	64 ~ 74	112 ~ 116	N-6°W	
	9号 南側裾部	230 ~ 256	104 ~ 128	64 ~ 90	N-82°E	
	10号 *	196 ~ 214	92 ~ 106	40 ~ 68	N-83°E	
	11号 *	190 ~ 204	約 130	66 ~ 70	N-83°E	
2号墳	内部主体	198 ~ 212	94 ~ 100	50 ~ 64	N-29°E	
3号墳	内部主体	215 ~ 225	100 ~ 105	40 ~ 56	N-32°E	包心、ガラス製小玉、刀子、鉄鎌他
	埴頂部土塙	138	32 ~ 35	22 ~ 30	N-46°E	直刀

第2表

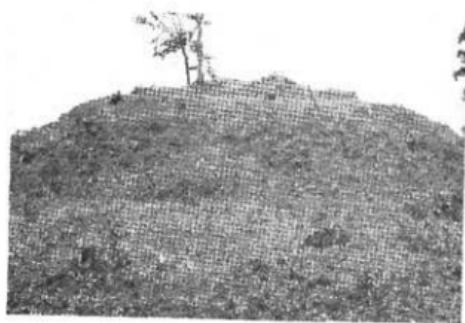
村上古墳群第3号墳内部主体内出土ガラス製小玉計測値一覧

No	タイプ	直 径	厚 さ	色 調	輪 考	No	タブ 直 径	厚 さ	色 調	輪 考	No	タブ 直 径	厚 さ	色 調	輪 考		
1	B-2	4.0	2.2	相	片面調整	29	A-2	3.5	1.5	水 色	片面調整	57	C-2	3.6	2.6	青	
2	C-2	4.0	3.0	青	*	30	A-3	3.5	1.9	水 色	片面調整	58	B-1	2.9	2.1	片而調整	
3	A-3	4.0	2.0	相	*	31	B-2	3.8	2.2	相	片面調整	59	C-2	3.1	2.8	相	
4	B-2	3.8	2.2	青	*	32	C-1	3.3	3.0	青	全面調整	60	B-1	3.2	2.0	*	
5	B-2	4.0	2.2	相	*	33	C-2	3.9	1.8	*	片面調整	61	B-2	3.8	2.2	青	
6	B-1	3.8	2.2	相	*	34	C-2	3.8	3.0	*	片面調整	62	A-3	3.1	1.9	*	
7	A-2	4.0	1.9	相	*	35	A-1	4.0	1.9	相	片面調整	63	C-2	3.4	2.0	片而調整	
8	B-2	3.5	2.2	青	*	36	A-2	3.2	2.0	青	*	64	C-2	3.5	3.0	*	
9	C-2	3.8	3.0	青	*	37	C-2	3.8	3.0	*	片面調整	65	B-1	4.0	4.0	相	
10	B-2	3.2	3.5	1.8	*	38	C-1	3.8	3.9	青	片面調整	66	C-1	4.0	3.0	*	
11	D-2	3.8	3.5	2.0	水 色	39	B-2	3.9	4.0	2.1	相	片面調整	67	B-2	3.1	3.5	片而調整
12	B-1	3.8	3.9	2.6	相	40	A-2	4.1	2.0	青	*	68	A-2	3.2	1.7	水 色	
13	C-2	3.6	2.8	青	*	41	A-3	4.4	2.8	黄 绿	全面調整	69	B-2	3.9	2.5	相	
14	B-2	3.8	4.0	2.2	相	42	C-2	3.8	4.0	2.9	青	片面調整	70	D-1	3.8	4.0	水 色
15	B-1	3.8	4.0	2.5	青	43	B-2	4.0	4.2	2.1	相	片面調整	71	A-1	2.3	2.6	*
16	D-2	4.0	4.2	2.6	相	44	A-2	4.0	3.2	1.8	*	72	C-2	3.8	2.7	青	
17	B-2	3.2	5.5	1.9	青	45	B-2	4.0	4.5	2.6	青	片面調整	73	A-2	3.2	2.9	片而調整
18	D-2	4.0	4.5	2.5	相	46	B-2	3.8	4.0	2.5	*	74	B-2	3.5	2.2	*	
19	A-2	3.6	3.9	2.5	青	47	B-2	3.2	4.2	2.2	相	片面調整	75	B-1	3.2	3.9	片而調整
20	B-3	3.3	3.8	2.1	*	48	A-2	3.2	3.4	2.1	水 色	片面調整	76	B-1	3.5	3.8	水 色
21	D-2	4.0	4.5	2.0	相	49	A-2	3.8	4.2	2.2	相	片面調整	77	B-2	3.9	2.3	相
22	B-2	3.4	4.5	1.9	青	50	A-2	3.8	4.1	2.3	青	片面調整	78	A-1	4.0	4.1	片而調整
23	B-2	3.5	4.5	2.1	青	51	A-2	3.9	4.1	2.0	相	*	79	D-1	3.3	3.8	青 色
24	B-2	4.0	4.9	2.1	相	52	A-2	3.5	3.9	2.1	青	片面調整	80	A-1	4.2	2.0	青
25	B-2	3.5	4.5	2.2	水 色	53	C-1	3.9	2.8	相	片面調整	81	D-1	3.5	3.8	片而調整	
26	B-2	3.2	3.8	2.4	青 白	54	C-2	4.4	2.8	3.1	*	82	B-1	3.8	4.1	*	
27	A-3	3.3	3.9	1.7	青	55	H-1	3.5	2.2	2.5	*	83	A-2	3.0	3.4	水 色	
28	D-1	3.2	3.6	2.6	*	56	B-2	3.3	2.2	2.5	*	84	A-2	3.8	4.1	相	

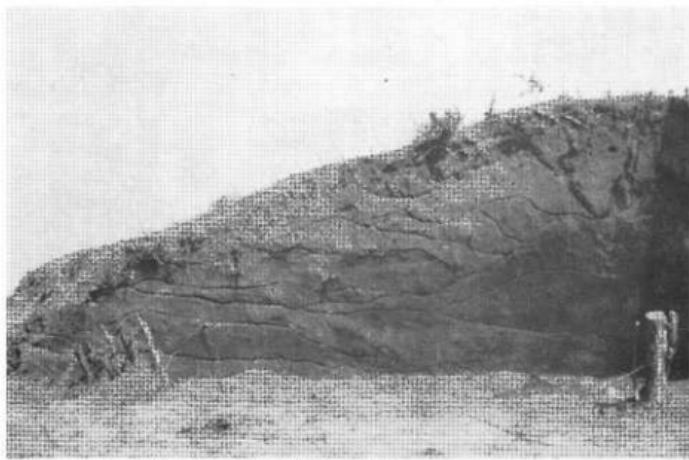
No	タイプ	底色	顔色	目	耳	背	腹	頭	脚	性別	年齢	種類	年齢	種類	年齢	種類	年齢	種類
55	A-2*	3.6 -3.8	1. 2.5	1. 2.7	8 青	片面調整	114	B-2	3.6 -3.7	2.2 -2.8	青	*	143	A-2	3.8 -4.0	2. 0	青	片面調整
56	B-2	3.8 -3.9	2.5 1.8	2. -2.0	7 青	片面調整	115	D-1	3.1 -3.9	2.5 -3.0	相	全面調整	144	D-2	3. -3.9	6. -2.2	青	片面調整
57	A-2	3.6 -3.9	2.5 1.8	2. -2.0	6 青	片面調整	116	H-1	3.5 -3.8	2. -2.9	青	片面調整	145	A-2	3.8 -3.9	2.0 -2.2	相	周面調整
58	A-2	3. -3.1	1. 1.9	1. -2.0	5 水色	片面調整	117	B-2	3.4 -3.7	2.2 -2.3	青	*	146	B-1	3. -3.9	8. -2.2	青	片面調整
59	A-2	3.1 -3.5	1. 1.9	1. -2.0	4 相	片面調整	118	B-1	3.5 -4.0	2.4 -2.5	相	片面調整	147	D-1	3.1 -4.2	2. -2	青	片面調整
60	D-1	3.4 -3.7	1. 1.9	1. -2.0	3 相	片面調整	119	B-1	4.0 -4.1	2.5 -2.8	青	*	148	B-2	3.6 -4.0	2. -2.6	青	片面調整
91	A-2	3.2 -3.6	2.5 1.9	2. -2.1	5 相	片面調整	120	A-1	3.4 -3.9	1.9 -2.2	青	片面調整	149	A-2	3.0 -3.3	1.8 -2.0	水色	片面調整
92	A-1	3.2 -3.5	1. 1.9	1. -2.1	4 水色	片面調整	121	A-1	3.2 -3.5	2. -2	青	*	150	B-2	3. -3.7	6. -5	青	片面調整
93	A-2	3.2 -3.6	1. 1.9	1. -2.1	3 青	片面調整	122	C-2	3.6 -3.9	2. -2	青	*	151	D-1	4. -3.8	3. -2	青	片面調整
94	A-1	3. -3.9	1. 1.9	1. -2.1	2 相	片面調整	123	H-2	3. -3.4	8. -4.0	青	片面調整	152	D-1	3.9 -4.1	2. -2.5	相	片面調整
95	A-2	3.4 -4.0	2. -2.2	2. -2.2	1 相	片面調整	124	B-2	3.8 -3.9	2.5 -2.6	青	全面調整	153	C-2	3.8 -4.0	2. -3.0	青	全面調整
96	A-2	3.1 -3.2	2.0 -2.0	2. -2.2	0 青	片面調整	125	B-1	3.5 -4.0	2.4 -2.7	青	片面調整	154	A-2	2.9 -3.2	1.5 -2.0	水色	片面調整
97	D-2	3. -3.2	2. -2.2	2. -2.4	1 相	全面調整	126	D-1	3.4 -3.8	3. -0	相	*	155	B-2	3.6 -4.0	3. -2.5	相	片面調整
98	D-2	3.2 -3.8	2. -2.3	2. -2.3	0 青	片面調整	127	A-2	3.2 -3.2	3.6 -2.0	青	*	156	C-2	3.5 -3.8	2. -2.8	青	片面調整
99	B-1	3.7 -4.0	2.2 -2.4	2. -2.4	1 青	片面調整	128	A-2	3. -3.8	8. -2	0	相	157	A-1	3.0 -3.2	1. -1	水色	片面調整
100	C-2	3.0 -3.9	2.8 -3.6	2. -3.6	0 相	片面調整	129	A-3	3.5 -3.9	2. -2.4	青	周面調整	158	A-1	3.1 -3.3	1.9 -2.0	青	周面調整
101	D-1	3.1 -3.8	2.6 -3.8	2. -2.8	0 相	片面調整	130	D-2	3.8 -3.9	2.0 -2.4	相	余油調整	159	A-1	3.2 -3.5	1. -2.0	相	余油調整
102	B-1	3.7 -3.5	1.9 -2.1	1. -2.1	1 青	片面調整	131	A-2	4.1 -4.4	2. -2	青	片面調整	160	C-2	3.0 -4.0	3. -2	青	片面調整
103	A-1	3.3 -3.9	2. -2.2	2. -2.2	0 相	片面調整	132	B-1	3. -3.6	2. -2	青	片面調整	161	C-1	3.2 -4.0	3. -2	青	片面調整
104	B-2	3. -3.8	2. -2.2	2. -2.5	0 相	片面調整	133	B-2	3.5 -3.8	2. -2.1	相	片面調整	162	C-1	3.2 -4.0	3. -2	青	片面調整
105	B-1	3.8 -4.0	2.2 -2.8	2. -2.8	0 相	片面調整	134	A-1	3.5 -3.8	2.0 -2.1	相	片面調整	163	C-1	3.2 -4.0	3. -2	青	片面調整
106	B-2	3.5 -3.9	2.0 -2.4	2. -2.4	0 相	片面調整	135	A-1	3.2 -3.5	2. -2	青	片面調整	164	C-1	3.2 -4.0	3. -2	青	片面調整
107	B-2	3.8 -3.9	2. -3.0	2. -3.0	0 相	片面調整	136	A-1	3.1 -3.6	1.6 -2.0	水色	*	165	A-1	3.0 -3.6	2. -2	水色	片面調整
108	B-1	3.1 -3.4	2.1 -2.5	2. -2.5	0 青	片面調整	137	B-1	3. -3.9	2. -2.2	青	*	166	B-1	3.0 -3.6	2. -2	水色	片面調整
109	B-2	3.2 -3.5	2.3 -2.6	2. -2.6	0 水色	片面調整	138	A-2	3.5 -3.8	1.8 -2.0	青	*	167	C-1	3.2 -3.7	2. -2	水色	片面調整
110	A-2	3.3 -3.5	2.5 -2.5	1.9 -2.2	0 青	片面調整	139	A-1	3.3 -3.9	1.8 -2.0	水色	*	168	B-1	3.0 -3.8	2. -2	水色	片面調整
111	B-2	3.1 -3.9	1.9 -2.5	2. -2.5	0 水色	片面調整	140	A-2	3.3 -3.9	2. -2	水色	*	169	C-1	3.2 -4.1	2. -2	水色	片面調整
112	B-2	3.5 -3.8	2.5 -2.7	2. -2.7	0 青	片面調整	141	B-2	3.5 -3.8	2.0 -2.3	相	*	170	B-1	3.0 -4.1	1.5 -2.0	白	白下材質不明
113	B-2	3.2 -3.4	2.1 -2.6	2. -2.6	0 青	片面調整	142	B-1	3.5 -3.8	2. -2	青	*	171	C-1	3.2 -4.1	2. -2	青	片面調整



図版1 上.古墳群遠景(東方より眺む)
下.古墳群近景(東方より眺む)



図版2 上.第1号塚全景(北方より眺む)
中.第1号塚全景(西方より眺む)
下.第1号塚全景(東方より眺む)



図版3 上.第1号塚発掘調査状況
下.第1号塚南北土層状況北側上段（西方より眺む）



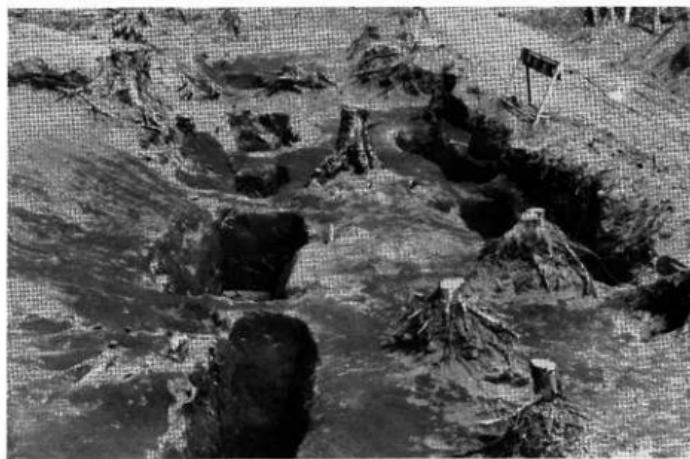
図版4 上.第1号塚南北土層状況南側下段(東方より眺む)
下.第1号塚東西土層状況東側上段(南方より眺む)



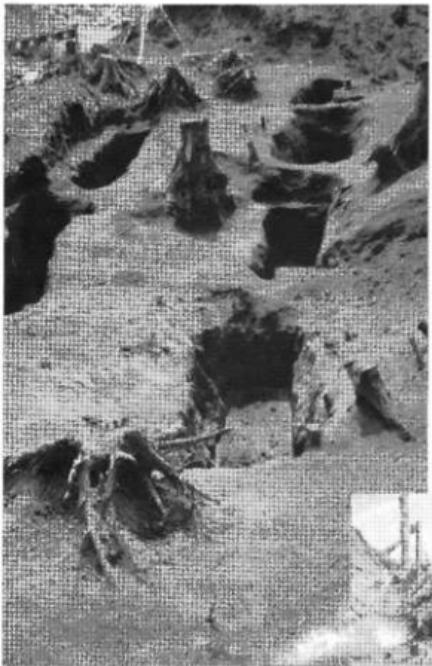
図版5 上.第1号塚南北土層状況北側下段（東方より眺む）
下.第1号塚第1土塁（西方より眺む）



図版 6 上.第1号塚第1号土埴（北方より眺む）
下.第1号塚東側裾部土埴群（北方より眺む）



図版7 上.第1号塚東側裾部土塙群（南北より眺む）
下.第1号塚南東裾部土塙群



図版 8
上.第1号塚東側据部土塙群
(北方より眺む)
下.第1号塚南側据部土塙群
(西方より眺む)



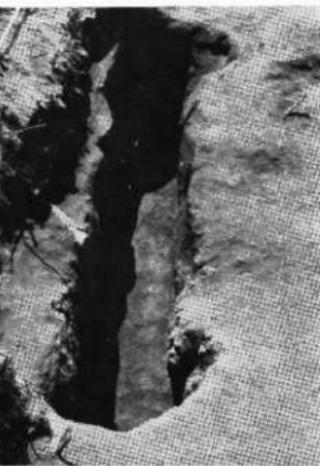
第 2 号 土 坡



第 4 号 土 坡



第 3 号 土 坡



第 5 号 土 坡



第 6 号 土 坡

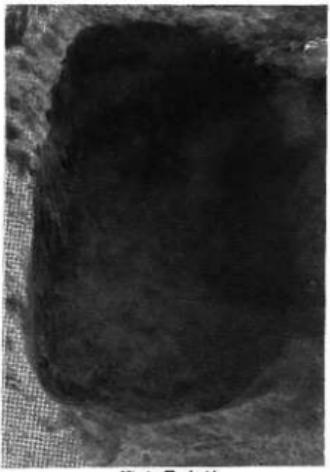
圆版 9 第 1 号 塚 土 坡 第 2 · 3 · 4 · 5 · 6 号 土 坡



第7号土坡



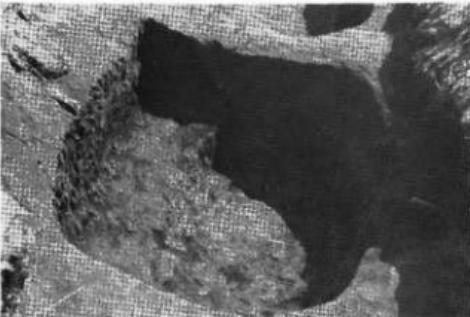
第8号土坡



第9号土坡

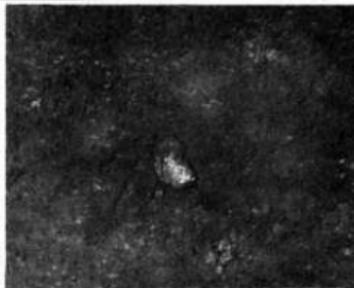
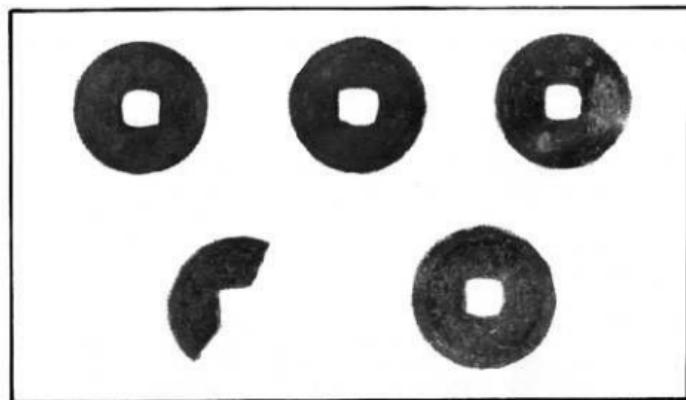


第10号土坡

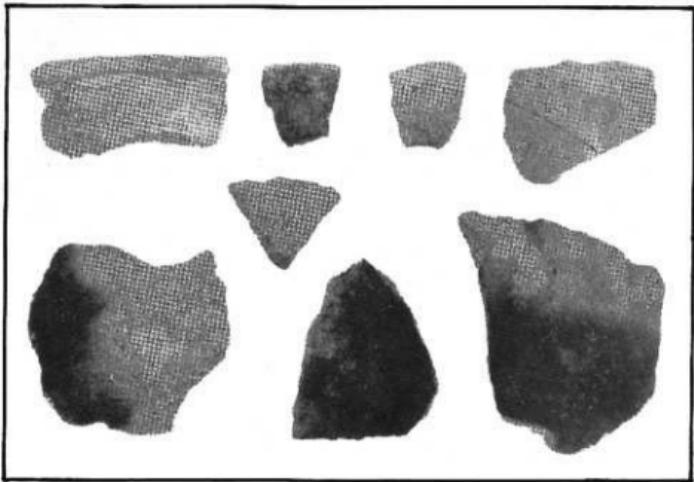
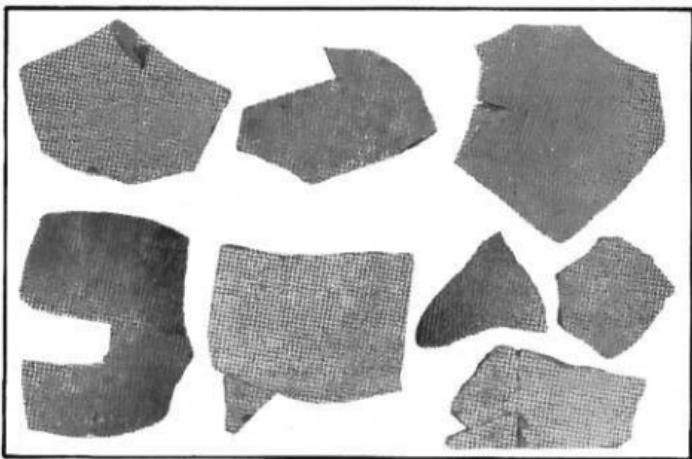


第10·11号土坡

图版10 第1号塚第7·8·9·10·11号土坡



図版11 第1号墳遺物および出土状況



図版12 第1号塚出土遺物（その他の遺物）



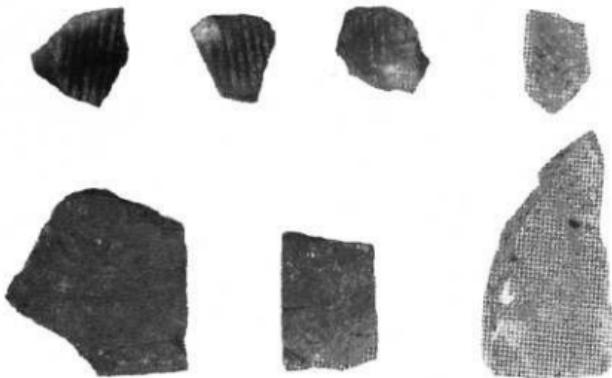
図版13 上.第2号墳全景(第1号塚より眺む)
下.第2号墳南北土層状況



图版14 上.第2号填埋丘·内部主体位置状况
下.第2号填埋内部主体



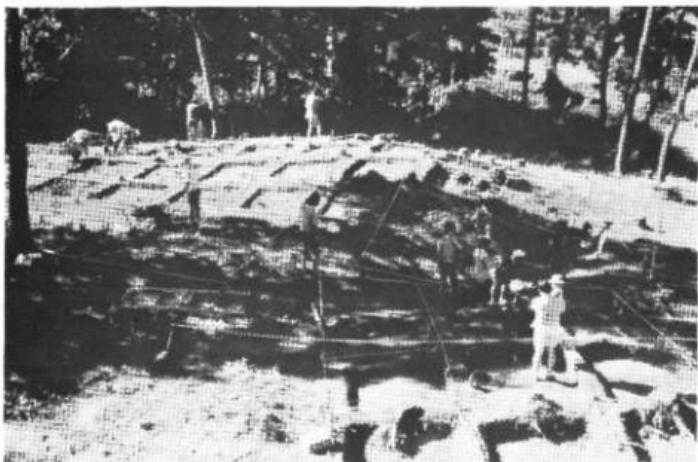
圖版15 第2號墳內部主體完掘狀況



圖版16 上.第 2 号 墓 墓 內 部 主 遺 物
下.第 2 号 墓 墓 出 土 部 遺 物



図版17 上、第3号墳全景（北方より眺む）
下、第3号墳全景（南方より眺む）



図版18 上.第3号墳発掘調査状況
下.第3号墳南北土層状況（西方より眺む）



図版19

上.第3号墳東西土層状況と内部
主体(南東より眺む)

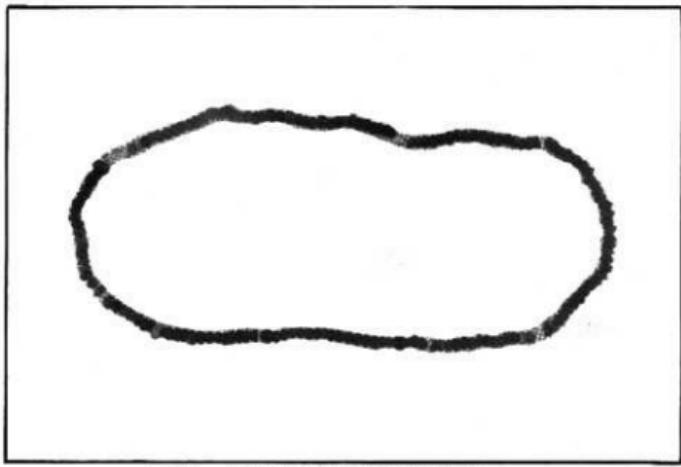
下.第3号墳内部主体完掘状況
(北方より眺む)



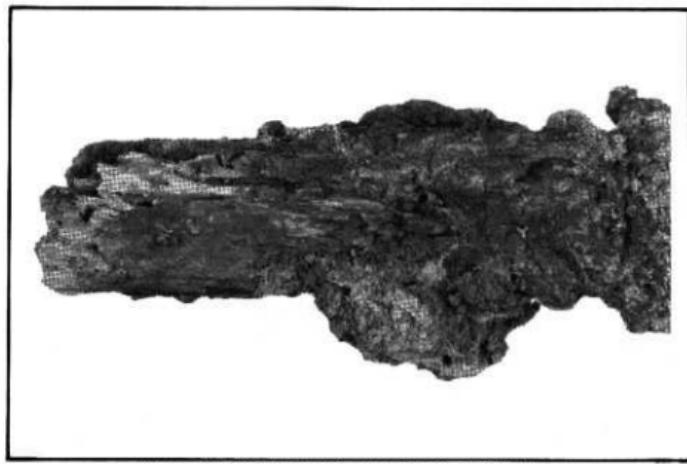
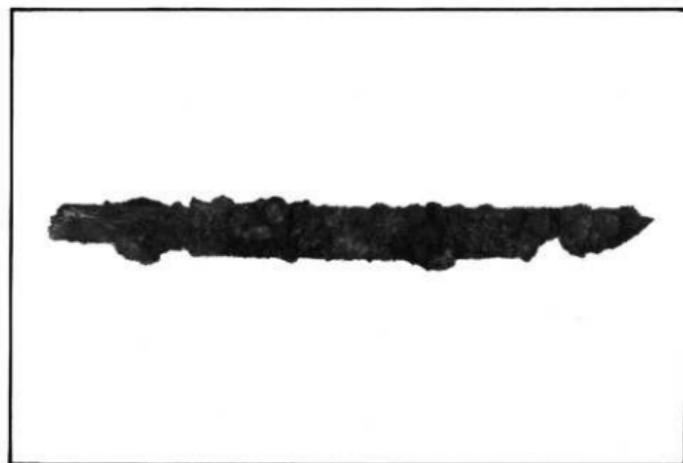
图版20 第3号境内部主体内玉类出土状况



図版21 第3号墳墳頂下土塙および直刀出土状況



図版22 上.第3号墳内部主体内出土鉄製品
下.第3号墳内部主体内出土ガラス製小玉



図版23 第3号墳墳頂下土塙内出土直刀および柄部拡大

八千代市村上古墳群

昭和 54 年 10 月 31 日 印刷

昭和 54 年 10 月 31 日 発行

発行責任者 八千代市村上古墳群発掘調査団
団長 竹石 健二

発 行 者 千葉県八千代市都市部都市計画課

印 刷 者 石井印刷株式会社
千葉県印旛郡八街町ほ 3 9 6